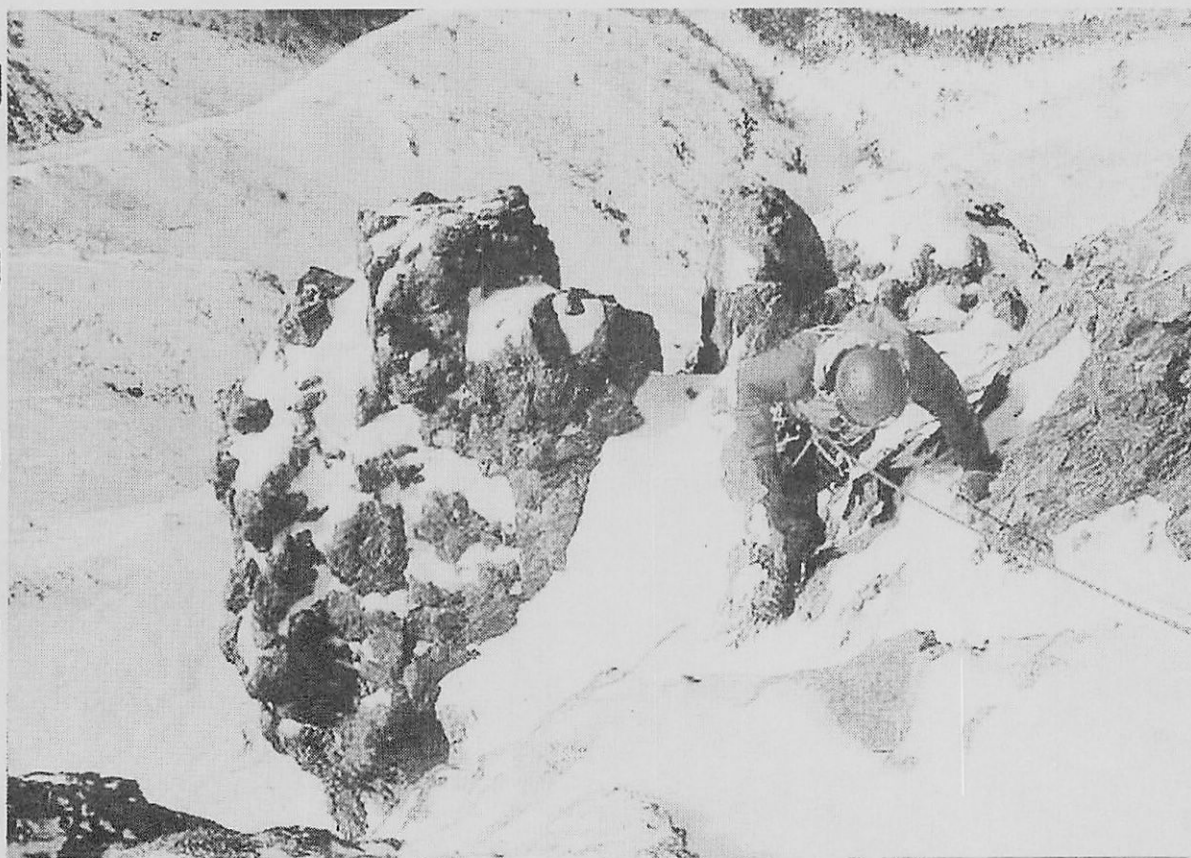


北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 52. 53号

2004年1月～2004年6月



ACC-J 茨城

目指せヒマラヤ!!

ROCK AND VALLEY 2004冬 & 2004春

No52 & No53



浅間山頂上を目指す本図、渡辺、名雪、吉田 Photo by SASAHIRA

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

リーダーへ初めの1歩

単独で山に登る以外は2人以上でパーティーを組むので、必ずどちらか一方がリーダーを努める事になります。

日帰りの山行でもパーティーのメンバーが多くなるとリーダーの役目は重要になってきます。メンバーの力量に合わせた山及びルートを選定して、更に山行日の天気予報を調べて山行の中止または決行を判断し、決行の場合には共同装備の割り付け等をします。

山に入ってからパーティー全員の体調を見ながら様々な場面での判断をしなければなりません。此处まで書いてふっと思ったが、山登りの楽しみを満喫するにはリーダーとして山行するのが一番じゃないかなと思います。しかし、リーダーとしての判断力は一朝一夕で身に付くものではありません。普段の山行でも各々の場面で各自が心の中で判断し、その時の山行リーダーの判断結果と比較して、もし、自分の判断結果と異なっている場合には、なぜこのように判断したかを山行リーダーに訊ねて見ると良いでしょう。このようにして山行を重ねれば山登りの面白みが徐々に分つてくると思います。

リーダーは山行の計画から全員が無事に下山するまでその責を負いますが、その代わり山行中はリーダーの判断には絶対的な権限が発生します。

ACC-Jには『俺がリーダーだ。俺が決めた事に従え』と伝説的なリーダーの一言が伝えられています。パーティー全員の安全確保の為にはこの位は当然の事です。

“山々は一つの別世界”と歌われていますが、厳しい世界には絶対的な強権が必要だと思います。その反面、力量の揃っ

たメンバーのパーティーのリーダー程楽なものはありません。リーダーが何も言わなくても、それぞれが黙って役割分担を負ってくれるので、リーダーはチョット重い荷物を背負うだけで済みます。非常用のツェルトやザイルがザックに入るだけで、後はアウンの呼吸で『どうする?』『行く?』『行くよ!!』等の言葉だけで事足りませんが、全員が山行リーダーの経験者ですから当たり前の事です。

リーダー初めの1歩は、経験豊富な人と一緒に山行で山行リーダーをやる事です。パーティーの一員としての山行とリーダーとしての山行では、全く違ったものが見えてきます。リーダーとしての判断の迷い、戸惑いを経験する事が成長を促します。(これは単独行でも同様な事を経験できると思います。)さあ、リーダーへ初めの1歩を歩み出して下さい。その為には各自が山行リーダーとしての山行計画を立てて、経験豊富な方にサブリーダーとして山行に参加して頂く事です。クラブの先輩諸氏も同様にしてリーダーへの1歩を踏み出した経験がある筈です。

さあ、次の休日には山行リーダーとして山に行きましょう。

木村 一

《目 次》

2004年 冬号 1月～3月 2004年 春号 4月～6月 ACC-J茨城

巻頭言	(木村) 1
目次	 2
集会報告	 3
山行報告	 4
北ア霞沢岳	(木村) . . . 5～7
安達太良雪訓	(木南) . . . 7～8
八ヶ岳権現岳東稜	(坂田) 9
常葉鎌倉岳&大滝根山	(本図) . . . 10～11
雨巻山	(菊地) 11
八ヶ岳阿弥陀岳北稜	(坂田) 12
八ヶ岳赤岳南峰リッジ	(菊地) 13
八ヶ岳アイゼントレーニング	(木南) 14
八ヶ岳赤岳主稜	(坂田) 15
八ヶ岳横岳石尊稜	(坂田) . . . 16～17
浅間山山スキー	(渡辺) 18
南ア 光岳	(本図) . . . 19～20
八ヶ岳旭岳東稜	(渡辺) 21
合同雪訓練 (水戸葵&ACC-J)	(木村) 22
川内山塊矢筈岳	(坂田) . . . 23～24
巻機山山スキー	(吉田) 25
会津大戸沢岳山スキー	(吉田) 25
会津三岩岳山スキー	(木南) 26
屋久島宮之浦川	(笹平) . . . 27～31
黒部横断	(渡辺) . . . 32～34
蓮華温泉スキー行脚	(木村) . . . 35～37
秩父入川真ノ沢	(坂田) . . . 38～39
富士山 (高度トレーニング)	(木南) 40
黒谷川西実入	(坂田) 41
特別寄稿 清ちゃんの思い出	(金沢) . . . 42～43
特別寄稿 岳友 金沢清との腐れ縁	(吉田) . . . 44～46
友好山岳団体の月報・会報	. . . 47～50
編集後記	(木村) 51

表紙 八ヶ岳赤岳主稜を登攀する木南 Photo by SASAHIRA

集会報告

[於 土浦 Gusto]

.....[1 月]

1月 14日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、鈴木、坂田、木南、須賀

1月 28日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、鈴木、坂田、木南

.....[2 月]

2月 18日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、吉田、坂田、鈴木

.....[3 月]

3月 3日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、坂田、木南、須賀

3月 17日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、渡辺、吉田、坂田、鈴木、木南、鯉河

3月 31日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、鈴木、坂田、木南

.....[4 月]

4月 17日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、坂田、鈴木、木南

4月 27日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、鈴木、木南

.....[5 月]

5月 12日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、木南

5月 26日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、木南

.....[6 月]

6月 9日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、坂田、鈴木、木南、正木、鯉河

6月 23日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、坂田、鈴木、木南、松田

.....

山行報告

《2004年1月～6月》

.....[1 月].....

12月31日～1月2日	北ア 霞沢岳	L木村、笹平、渡辺、鈴木、木南 (東京ACC-J 名雪、金沢、宮路)
1月24日～1月26日	安達太良雪訓(岳連)	笹平、木南、宮路
1月26日～1月28日	八ヶ岳権現岳東稜	L笹平、坂田

.....[2 月].....

2月 1日	常葉鎌倉岳&大滝根山	L本図、渡辺、坂田
2月 15日	雨巻山	L本図、菊地
2月 27日	八ヶ岳阿弥陀岳北稜	L笹平、吉田、渡辺、坂田
2月 27日	八ヶ岳赤岳南峰リッジ	L本図、菊地

.....[3 月].....

3月 10日	八ヶ岳赤岳主稜	L笹平、坂田、木南
3月 11日	八ヶ岳横岳石尊稜	L笹平、坂田、木南
3月 14日	浅間山山スキー	L本図、笹平、吉田、渡辺、名雪、宮路
3月20日～3月 21日	南ア光岳	L本図、木村、菊地
3月27日～3月28日	八ヶ岳旭岳東稜	L笹平、渡辺、木南

.....[4 月].....

4月3日～4月4日	水戸葵山岳会とACC-J 合同雪訓 (荒沢岳)	本図、木村、菊地、渡辺、坂田、木南、 名雪、水島 【水戸葵山岳会】 川村、武藤、坂本、鈴木、安原、市村
4月11日	巻機山山スキー	L木村、吉田、名雪、宮路
4月18日	会津三岩岳	L木村、木南、笹本
4月25日	会津大戸沢岳山スキー	L木村、吉田、木南、宮路

.....[5 月].....

4月29日～5月3日	黒部横断	L名雪、渡辺、本図
5月1日～5月4日	北ア雪倉岳、朝日岳	L木村、笹平、吉田、木南、菊地、中島、江平
5月11日～5月13日	秩父入川真ノ沢	L笹平、坂田
5月22日～5月23日	富士山	L笹平、渡辺、木南、名雪

.....[6 月].....

6月5日～6月6日	清津川熊沢	L名雪、木南、水島
6月8日～6月9日	黒谷川西実入	坂田(単独)

北ア霞沢岳（金沢氏遺体搬出概要）

2003. 12. 31～2004. 1. 2

パーティー L 木村 一、笹平 孝、渡辺聡子、木南真紀子、鈴木 拓
名雪博二、金沢 清、宮路郁子（ACC-J東京）

昨年末に徳本峠から霞沢岳を目指した年末年始山行中に、ACC-J東京の金沢清氏が急性心不全の為に病死しましたが、金沢氏の遺体搬出時の詳細を報告致します。

12月31日

徳本峠から霞沢岳の登頂を目指した年末年始山行の為に、沢渡の駐車場に茨城パーティー笹平（L）、木村、渡辺、鈴木、木南の5名と東京パーティー名雪、金沢、宮路の3名が集合。

連絡の行違いから異なった駐車場に車を止めたので、茨城パーティーから約1時間遅れで釜トンネルから歩き始め、上高地～明神と歩を進めたが金沢は特に体の不調を訴える様子も無かったとの事（名雪談）

以降名雪記録

15:10 事故発生、

金沢がザックを雪面に置き、前屈みに、うずくまる。
標高1900m地点、脈拍、呼吸なし、直ちに人工呼吸、心臓マッサージを名雪、宮路にて行う。

15:20 脈拍、呼吸なし、名雪、
宮路確認

15:35 瞳孔散大名雪、宮路確認、
宮路を付き添いとして現場に残し、
名雪は徳本峠のACC-J茨城先行パーティーに、救援依頼に向かう。

16:20 名雪徳本峠着、先行パーティーACC-J茨城5名に協力依頼、長野県警、家族、在京ACC-J、南アルプスへ向かった本図隊、への携帯電話での連絡、通報、事故現場への応援出動を依頼し、木村、笹平の2名が出動

16:50 名雪、徳本峠発

16:55 木村、笹平徳本峠発

17:20 名雪事故発生現場標高1900m
地点到着、宮路の無事確認

17:25 木村、笹平到着、両名にて金沢の脈拍、呼吸無しを確認、これ以降金沢を、遺体として取り扱うことを余儀無しと考えるに至った。
現場の雪の斜面をスコップで1.5メートル掘り下げ平面を作り銀マットとツェルトで遺体を包み、細紐で縛り、雪面上方6～7メートルの針葉樹（直径20センチ）にザイルで結び流れ止め、とし、事故発生現場に遺体を安置した。

17:45 事故発生現場は45～50度の雪の斜面であり、チリ雪崩が時々発生し天幕設営には不適のため、下降して幕場を探すため現場を出発、名雪、木村、笹平、宮路、

19:00 雪崩の可能性の少ない標高1700m地点に天幕設営後、名雪、木村、笹平で遺体搬出方法と必要機材、パーティー全員の収容、全装備の荷降ろし作業について検討し確認する。

5:00 起床

7:00 名雪、木村、笹平、遺体収容のため事故発生現場の遺体安置場所へ向かう、遺体搬出は事故発生現場から直接沢筋に下降し、以後沢沿いに降ろすのが、搬送しやすいものと思われるので、沢筋をラッセルし、雪崩の可能性を観察しながら事故現場に向かう、宮路はテントキーパーとし、水作りと保温用飲料作成をし、待機する

7:45 沢筋を登り現場を通り越したと思われるあたりの右岸の枝沢の雪面を登ると、徳本峠から渡辺、木南、鈴木の名が下降してきて合流する。

7:50 事故発生現場6名集結。直ちに遺体掘り起こして梱包作業開始。シュラフに入れ、銀マット、サーマレストマット、テント、ツェルトで包み4ミリ細紐で4箇所を縛る。ツェルトの中にカラビナを8箇所に入れテープシュリングで布の上から止め、これを引くザイルにカラビナで固定する。引く方(前)に8、1ミリザイル2本、抑える方に(後ろ)に9ミリザイル1本として力の調整をし、シート搬送とする。

8:16 遺体梱包終了、搬送中の注意点(岩、木などに当てない、作業中に我々が怪我をしない)を確認し、冥福を祈って黙祷、沢に降ろすためのザイルセット、事故現場確認目印のための赤布を現場の木の枝に2本同位置につける。

8:34 、6名にて搬送開始。(このころ上空をヘリが1回旋回、森林地帯なのでこちらからもはっきりヘリを視認出来ず)

8:51 標高1700m地点のテントに到着。小休止。

9:10 渡辺、木南の2名で荷降ろし作業。鈴木は荷降ろし作業と同時に遺体搬送のためのラッセル。名雪、木村、笹平が遺体搬送に当たる。宮路は標高1700m地点のテント撤収、荷降ろし準備。

10:00 徳本峠入り口到着、到着とほぼ同時に長野県警ヘリが上空旋回。橋の上で合図を送る。渡辺、木南、鈴木は徳本峠入り口に荷を下ろし、標高1700m地点のテント撤収と荷降ろし作業に向かう。

10:15 ヘリから、長野県山岳救助隊員2名が降下し、徳本峠入り口前の橋の下流100メートル地点の河原の雪面で長野県山岳救助隊員に金沢清の遺体を引き渡した。

その後、遺体はヘリに吊り上げられ、豊科警察署に搬送された。豊科赤十字病院の中野医師により遺体検案が行われ、家族の事情聴取の後、家族に引き取られた。

名雪は遺体引渡し直後、事情聴取のため豊科警察臼田警部補と上高地経由豊科警察へ同行した。明神～上高地間で、南アルプスから急遽救援に駆けつけた本図隊(本図、鯉河、菊池)と会い、装備の荷降ろし作業の援助を要請した。

木村、笹平、渡辺、木南、鈴木、宮路は遺体引渡し後、標高1700m地点のテント撤収と全装備の荷降ろし作業に取り掛かる。登ってきた救援の本図隊(本図、鯉河、菊池)の応援を得て、全装備を徳本峠入り口～明神～上高地～釜トンネル＝沢渡(名雪の車を回収回送)＝松本＝豊科警察へと集合した。

金沢急死の通報を受けた東京ACC-Jの水島、吉田、仲川の3名は12月31日の事故発生時から金沢清の家族、親戚、在京会員、山行会員の家族等との連絡をしながら、1月1日午前08:45時から豊科警察に詰め、南アルプスの本図隊、徳本峠の本隊を結ぶキー局として連絡調整に当たった。

18:50 木村、笹平、渡辺、木南、鈴木、宮路、本図、鯉河、菊池、水島、吉田、仲川、名雪の13名が豊科警察に終結した。すでに金沢清の遺体は家族に引き取られて、我が家への道を辿っているが、すべての作業が1日のうちに驚異的な速さで行われ、参加隊員に怪我も無く無事終了できた事と参加隊員全員の努力に感謝し、金沢清の冥福を祈り黙祷し解散とした。

尚、この後自由参加で白樺湖姫木平山小屋にて、遺体は家族に引き取られ、すでに我われの手には無いが、金沢清の通夜をしめやかに行った。

(名雪 記)

安達太良雪訓（岳連主催）

2004. 1. 25～1. 26

参加者 笹平 孝、木南真紀子、宮路郁子

マッターホルンへの道（1）

2002年の秋に友人とスイスに行きマッターホルンを見てから、私はどうしてもこの山に登ると決心しました。頭から離れなくなっていました。すると縁あってACC-Jに入会させて頂き、また、先輩方に付き合っただけのことにもなり、トントン拍子で話は決まっていきました。2004年の7月下旬に登山予定を本格的に立てたところあと足りない物は私の技術だけということに気が付かされました。大変だ。ここから本当のマッターホルンへの特訓が始まりました。

あまりに未熟な私にこのままではやばいと本図さんは次ような計画ができたらまあ登れるんじゃないかなべと立ててくれました。

マッターホルンのトレーニングメニュー（本図）

3月下旬 八ヶ岳東面 1泊2日
東稜程度でいい

4月中旬 富士山 1dayピストン
スキー、スノーボード使用
せずアイゼンのみ

5月中旬 中ア宝剣岳中央稜 1day

6月上旬 広河原から北岳往復 1day
または、黒戸尾根から駒ヶ岳往復 1day

6月下旬 富士山高度順応 1泊2日

2004年に入ってから私の山行スケジュール

12/31~1/2	霞沢岳登頂予定ながら 金沢さんの急死の為 敗退
1/25~26	安達太良山の茨城岳連 主催の冬山訓練に参加
2/28~29	八ヶ岳(赤岳)にアイゼン トレーニング。
3/7	御岩山にてアイゼン 登攀訓練 (本図、笹平、木南)
3/11~3/13	八ヶ岳に登攀 (笹平、坂田、木南)
3/27~3/28	八ヶ岳旭東稜
4/3~4/4	荒沢岳雪上訓練
4/18	会津三岩岳
4/25	会津大戸沢岳
5/1~5/5	雪倉岳・朝日岳 (蓮華温泉)
5/22~5/23	富士山
6/5~6/7	清津川熊沢
6/20	谷川岳東尾根

この中で後で役に立ったことなど担当になったところは書いて行きたいと思います。

安達太良山は岳連が行う冬季講習会
は1泊2日で安達太良山で行われました。

笹平さんは指導員研修。私と宮路さんは中級コースを選択しました。

私と宮路さんは田所さんというジェントルマンな雰囲気漂うおじさまに指導を受けました。同じコースを受講するのは全員女性でした。

1日目はわかんの歩行とアイゼン歩行とアイスアックス技術の練習

2日目はそれプラス滑落停止等の技術を学びました。

それぞれの山岳会でかなりやり込んでいるのかなーという感じでしたが、細かいところまで確実にそれを実行出来ている人は少なかったように思われます。(もちろん私を含めて)スタンディングアックスビレイ、コンテニユアスをメインに習いましたが、本当に出来るかといわれると未だに疑問です。また練習したいです。

今回のモンブランではクレパスへの墜落防止にコンテニユアスを使用しましたが、ロープのゆるまない等間隔であるき続ける難しさなどを感じました。

安達太良のくろがね小屋はとても情緒があり、温泉も素晴らしかったです。講習それ自体と同じくらい多くの山男と山女と交流を深められたことは思い出深いです。また機会があったら参加したいです。

(木南 記)

八ヶ岳権現岳東稜

2004. 1. 26～2004. 1. 28

パーティー L 笹平 孝、坂田英希

あつという間もない
瞬間、足元は宙に揺れた
結局この出来事が山行の敗退を決定づけた

自傷的な山への焦りは日々募っていた。そしてどうしようもなく日々は過ぎた。否、正確には自分自身、何もしなかったのだと懺悔する。

実際、ラッセルに苦しみ何の役にもたてなかったことは今もって痛切に感じている。

時間は刻々と過ぎていき、ここで限界となった。ただ、ココロに曇りは一点もなかった。

悔しさ以上の力不足を知ってしまったからであろうか秋の晴天のようにキリリと澄んだ高い空にも似た爽快な気分であった。

そして、まるで途方にくれたように権現岳を背にした。

出合の小屋はありがたい事に薪ストーブがある。これを囲んでの酒宴はおよそ山とは思えない。最近ハマっている日本酒などをちびちび飲みながら、これでもかというほどのつまみの数々。

ナマモノを持ち込めるのも冬ならでは。ストーブで焼けば、たちまちオカズを凌ぐ一品料理となる。

思えば山行前日のディナーよりも豪華なような・・・。

届かない一手がある

その一手をつかむ時はいつかきつと来る。辛くっても楽しいと、悔しくっても楽しいと、どうしたって好きなんだからと素直になれば少しは胸を張れる。

とっても小さな事かも知れないけど、それをものにできたなら捨てたもんじゃありません。

たのしい冬はまだまだこれから

(坂田 記)



権現岳東稜を登攀中の坂田

常葉鎌倉岳&大滝根山

2004. 2. 1

パーティー L本図一統、渡辺聡子、坂田英希

阿武隈山地には鎌倉岳という名の山が2つある。常葉町と古殿町にあるのだが、前者の山の方が岩っぽいというのでそちらに行くことにした。さらに、それだけでは時間がもったいないので大滝根山にも登ることになった。

登山者には、ガツガツ登るタイプと、まったり登るタイプがあるが、私は前者であろう。さらに、岩や沢に限らずハイキングでも何でも好きである。渡辺も恐らくこのタイプで、だからこのような山行は彼女と行くことが多い。時間があれば一つでも多く登りたいので今回も山のハシゴである。兼、私のリハビリ山行で、坂田も一緒に行くことになった。

前夜、山根小学校近くの国道288号線の路肩に駐車して軽く宴会をとりおこなう。以前お酒の好きな女性会員がいたが、その頃からこの前夜の宴会が常習化したような記憶がある。

翌朝登山口に向かって細い道を進むと、集会場（公民館？）の前に公衆トイレがあった。駐車スペースもあり、ここから歩いてよいのであるが、行ける所まで車で行く。

林道の終点らしき登山口の看板の所にも数台止められる駐車スペースがあった。この辺は積雪が20センチくらいあり、四駆の車を雪を踏み固め、スペースを確保した。

雑木林の中を行くといったん少し下る。そこが石切り場であった。ここから頂上までは急傾斜でせりあ

がっている。古い林道があるので雪がなければここまで車で来られるのかも知れない。

途中、茨城から来たというパーティーに会い言葉を交わす。たしか鹿島から来たと言っていたようだ。登りついた頂上は岩峰なので視界がきき、景色がとてもよく気持ちよい。

周りの岩はボルダリングができると聞いていたので、フラットソールも持ってきたが、今日は雪がありとても無理である。

下山は往路を辿り、次の目的地、大滝根山に向かう。道路地図とにらめっこしながら仙台平に着いた。鬼穴で登山口の看板を見たが、さらに林道を回りこんでその先に車を止める。

林道は圧雪されてスリッパしやすい状態で、スタッドレスタイヤを履いてきて良かったと胸をなでおろした。ここにも登山口の道標があり、そこから出発。

薄暗い杉林の中を歩いて行くと、ハシゴや小さい岩場もあるらしいが今は雪に埋もれており、いつの間にか通過。やがて頂上に着いた。

なんと頂は自衛隊のフェンスで囲まれており、三角点もフェンスの中5m先に見え、それに触れることすらできない。そのわきは巨大なレーダー基地になっていた。祠も思ったよりしっかりしたもので、鳥居もあった。峯霊神社というらしい。

下山途中、ペラペラ石⇒という道標があり、名前から興味があり行こうとしたが遠そうなので諦める。

これまで続いてきた福島低山雪山ツアーはいくつを数えるであろうか。雪がなければただの低山だが、雪が着くと様相は一変する。

霊山でも蒲生岳でも佐倉岳でも経験したが、非常に面白い山に変貌するものもある。福島に限らず、茨城や栃木、群馬などでこういう山行をやってきたが、これからも時間の許す限り続けていきたいものである。

車に戻り、阿武隈洞のそばを通過して針湯温泉に向かう。良い風呂だが、名前が「老人憩いの家」という。ちょっと気に入らない名前だけど、入湯料250円なので二重丸をあげるとしよう。

(本図 記)



常葉鎌倉岳頂上にて 本図、渡辺、坂田

雨巻山

2004. 2. 15

パーティー

L 本図一統、菊地光夫

先週ゲレンデスキーに行ってきたので、今日のはのんびりと休日を過ごしていると、午前中本図さんより電話があり、今からハイキングにいくべーとの事。二つ返事で30分後には出発。

場所は八郷からはわりと近い栃木県益子町のはずれの方の里山だ。この日は風が強く畑から土煙がひどかった。約1時間位で登山口に着き、雨巻山だけだと直ぐに着いてしまうので隣の三登山からぐるりと回るコースを取り、

約2時間で雨巻山の頂上に着きのんびりしていると、風が強い日なので、視界もよく遠くは水戸の県庁の建物までみえた。

下りは反対側の尾根の方に行くと途中に猪転げ坂と言われるジグザグの急坂があり、まずまずのハイキングコースである。下ること約1時間で車に戻る。近くにはニジマスの釣堀があり、ぶらっと見学をして帰った。

(菊地 記)

八ヶ岳阿弥陀岳北稜

2004. 2. 27

パーティー L 笹平 孝、吉田 仁、渡辺聡子、坂田英希

晴天ナリ、晴天ナリ
雲ひとつなく晴天ナリ
規則正しく突き出す左右の足は一步踏み出すたびに喜びを噛み締めた。
思いのままなんてそう滅多にあるもんじゃあない。
八ヶ岳の峰に囲まれて、ひたすら空は眩しかった。

行者小屋から中岳コルへの道を歩く。しばらくで目指す阿弥陀岳・北稜が正面に見えてくる。
そこから北稜への登行が始まる。

クラストした斜面をグイグイ登り、稜に出てから一投足でJP
灌木のついた急斜面を痛快にガシガシ登り込めば、あっという間に第二岩峰。

1ピッチめは笹平リーダー
岩峰の左に支点がありそこから右上。バンドを右へと数歩進んで直上するとテラスに支点がある。

2ピッチめ。お達しを頂き、坂田リード。階段状フェースを登ると小さなリッジ。リッジを超えて足場を整えビレイ。あっという間の出来事のように感じた。

笹平リーダーから教示を受けながら後発パーティーを迎えて登攀は終了。

そこを過ぎたらあとは緩い雪面を阿弥陀岳へと詰める。

大休止のあと阿弥陀を後にした。

コルからは脱兎のごとくシリセードまるで子供のように雪に遊ぶ。
いや、本質は子供なんだろうと思う

海岸で波に遊ぶ子供たち
そしてその向こうには紺碧の太平洋なんてことないこんなときが子を持つ身にはシアワセな瞬間なんだろうと思う。

しかし、何かが物足りなかった。
我侬といわれても仕方がない。やっぱり不幸者なんだろうと思う。
全面的にそんなシアワセに降伏できなかった。

こんな自分は許されているのだろうか、子供のような大人が子供らしい子供に何かしてあげられているだろうか。そしてあの人は。

こんな自分は許されているのだろうか。

下山途中、阿弥陀岳が輝いたもはや言葉にならない声。

届いて欲しいあの人に。

(坂田 記)

八ヶ岳赤岳南峰リッジ

2004. 2. 27

パーティー L本図一統、菊地光夫

2月も明日で終わりになる。本来ならば寒い日が続いて厳しい季節なのだが、今年は、春の訪れも早いと見えて美濃戸口の駐車場の周りは雪が少なく難なく集合できた。

翌日、早朝美濃戸山荘まで1台の車で入り行者小屋へと向かう。天気は良くもなく悪くもなく大同心や阿弥陀岳も良く見えた。2時間弱で小屋につきテントを張り登攀の準備をする。そこに、神田さんが見えて立ち話をしながら山の状況聞き別れた。

木村、小南パーティと一緒に文三郎道を登り、赤岳主稜の取り付け点を超えて少し登った所より登攀が始まった。

南峰リッジから延びている岩稜までが第一歩でノーザイルのトラバースになる。足場が悪く、ピッケルもアイゼンも不安定でびびる。トラバースは左が山側はいいが、右足が山側になるのは苦手である。やっとの思いで本図さんと合流。雪の状態が悪く支点もあまりないから気を付けて登るようにとの確認があった。下部は脆い岩稜の所をするするとザイルが伸びていった。

南峰リッジは両側のルンゼが浅く、尾根も短く傾斜がゆるいので貧弱である。尾根の傾斜がなくなって左側の尾根と合すると、2メートルほどの岩峰があり難なくザイルは伸びていった。左側の主稜パーティの動きが良く見え、雪の状態が余りよくないのかザイルの伸びがあまりよくないように見えた。風も強く気温も

低いので、本図氏の登攀は厳しさが加わりザイルを引く強さで分かり手応えを感じる。

大きな岩峰が現れ、真ん中の凹角を抜けて右側のルンゼに出る。この辺まで来ると上部も見えてきて、あと少しと言う事が分かる。最後まで手を抜かずきちんと稜線までザイルをつけて登攀を終えた。7ピッチの約3時間の登攀であった。

山頂で握手し木村、小南パーティに無線を入れたがつながらなく、我々も寒いので足早に地蔵尾根へと向かう。途中主稜パーティとすれ違う。

赤岳からの急なくだり坂ではまだ膝が治っていない本図さんには登攀よりもきつい下降だったかもしれない。途中休みながらみんなの待つテン場まで下り、時計を見ると4時を少し回っており、坂田君は我々パーティを待っていたが遅くなるので一足先よろしくとの伝言を残して下山していった。

残りのメンバーは翌日の登攀の打ち合わせと、確認をテントの中で一杯飲みながらしていた。夜半より風が出てきテントがしなる3時には起きて外を見ると、相変わらず雪混じりの強風が吹きまた眠りにつく。

5時頃より皆今日の天気を予想しているが、天気は一向に良くならず8時頃までは様子を見ていたが木村リーダーの一声で温泉直行に決定、今回の山行は人数も多く楽しい山行になった。

(菊地 記)

八ヶ岳アイゼントレーニング

2004.2.27

パーティー L木村 一、木南真紀子

マッターホルンへの道（2）

マッターホルンで一番危険なものは下山だと言われる。それを聞いた時、アイゼンの歩行が数度しか使用した事がなく下り道での経験はなかった私には余りよく解りませんでした。

そこで木村さんが八ヶ岳の赤岳に連れて行ってくれました。行者小屋から文三郎尾根を登り、山頂に赤岳頂上小屋、赤岳天望荘、そして地蔵仏から地蔵尾根を通して行者小屋に戻るコースでした。

文三郎尾根の途中まではトレースの付いた雪道をトコトコと歩くだけでした。

樹林帯を抜けたところから状況は一変し、雪が風で吹き飛ばされており、カリカリのアイスバーンとなっていました。登るときのテクニックとしてはキックの仕方、足を向ける角度など、風が強くなってからはピッケルの持ち方の意味、風に流された時の確保の仕方などを習いました。

その頃は風はあったが天気もよくふふーんとか思っていたのが、山頂付近では顔が痛くなるほど風にビックリしました。頂上で少し休憩したのち下りへと。

下りで転倒すると命取り。ピッケルで止められなければさよならだよ。でも自分の足の内側に引っかかりやすくなりがに股でないと転げやすいよ。下で聞いてもさっぱり解らないことが体に冷や汗とともに染みつきました。

この日、風は強いがお天気はよく見渡す風景は最高でした。

けれど訓練で2週間後に石尊稜を登攀後の帰り道ココを通りましたが、海老のしっぽが出来るほどの吹雪でとても同じ所には見えませんでした。

その時に山が天候でこんなに変わる物かと改めてびっくりさせられました。

1日目は赤岳に木村さんに連れられ登り、2日目は吹雪のために帰りました。

（木南 記）



赤岳頂上での木南

八ヶ岳赤岳主稜

2004. 3. 10

パーティー L 笹平 孝、木南真紀子、坂田英希

見上げるとそこには青空が広がっていた。

またもこの好機をヒットした。
なんということか！俺って晴れ男かもと、調子に乗るとなんだか後が怖いので今日は今日もでひとまず感謝。

「全国の晴れ男、晴れ女の皆さん、ありがとうございます」

さらに見上げると目指す主稜も「ここまでおいで」と言っている。

まあ、まあ。焦りなさんな
まずは今宵の宿を建ててから。

疲れた体に鞭打って、少し重い荷物ぐらい頑張ってしまうわなあ。
アットー的に楽しいんだもの。どうしたってうれしいんだもの。

主稜の取り付きは顕著なチョックストーン。

1ピッチ目、ぎこちなくラインを引かせていただく。

普段寡黙な、いや寡黙だと思っている坂田が饒舌になるには、山と一献あれば充分すぎる。

座を囲み、聞き、笑い、語る。

こんな時間はこの上ないシアワセ
無心に登攀をしながら今宵の至高に想いを馳せる。

しばらくは雪面をガシガシ登る。
ひと仕事こなせばもうすでにビールの旨い頃合い

あの一口が喉を鳴らして沁みるあたりがなんともいえない。

くわえて、誰も言い出しやしないけど酒の肴はきつと豪華な筈。

少なくとも坂田はそれを期待しているのですよ。

幕場に帰るなり「フフフ」と不敵な

笑みを浮かべながらブツを取り出せば一様に「ほほう」と唸る。

そんな一幕を期待して後半の登攀にも気合が入るのです。

後半は形状を失いつつある尾根から左の尾根へと乗り移る。

おおむねホールドは安定しており快適なピッチ。

一緒に登るということ。

寝食共にするということ。

訥々と語り合うこと。

ザイルを共にするということ。

この瞬間、きっと忘れられない。

トップの笹平リーダーは寡黙にラインを引いて岩陰に隠れる。

綱はまるで生き物のように微妙な動きでたちまち「あと十」となる。
綱の動きは彼の意味。不思議と彼の姿が見えてくる。

と早いとこ感じてみたいものです。

晴天の下、歓喜の瞬間を迎えた。

坂田にとってそれはただの登攀では無かった。

巧く言えないんだけど不思議とそんな気がした。

下山は文三郎に行く。

肴と綱と喜びと

胸いっぱい膨らませて……。

(坂田 記)

八ヶ岳横岳石尊稜

2004. 3. 11

パーティー L 笹平 孝、木南真紀子、坂田英希

雪はサラサラと頭上を霞め飛ぶ
新鮮な光はここまで届かない。
薄ボンヤリとなんとなく明るくなっ
ている、そんな天候だ。

三叉峰ルンゼを少し登ると取り付
きのチムニーが右上している。
アイゼンの前歯とパイルを利かせて
いく。

昨日の好天に比べるとこんな日に
登攀などとはよほどの物好きが、と
思う。

思うけれども、やっぱりねえ。
なぜだかかえってワクワクするのだ
からもはやビョーキの部類なのかと
例えるなら、水槽で飼われている魚
が小川から大河へ、また海へと旅立
つワクワク加減といったところか。

目に映る世界は実に広がった
幼少の頃、自分の住む街は世界の全
てであり広大だった。
しかし、道はもはや落胆するほど狭
く、街は今や色褪せるばかり。
まるで水槽だ。

下部岩壁は岩と草付に雪がつく
ここぞという時に上からチリ雪が落
ちてきて目も開けられないのに苦労
させられながらも口元にうれしさを
隠せなかった。

ほんとはきれいな雪稜なのでしょう。
ただ視界のない今はただの雪尾
根になってしまった気がしないでも
ない。息を切らしてラッシュするも
このころから風が渦を巻きうねり
となって舞い続けた。

杵を感じ始めたのはいつの頃だっ

たか。まあ、今となってはどうしても
いいこと。

山をはじめて世界は変わった。一
種の衝撃であった。

上部岩壁は岩を抱えて右に回りこむ
ところが少し緊張する。
とはいえセカンドの身。
重心を意識しながら足元を置いてい
けば問題ない。

風はなお強く、高さに比例して風
速を増す。

エビノシッポが10cmほどに成長し
ちょうど一口サイズスナック菓子の
ような歯ごたえでほんの少しだけど
口も潤う。

風雪にヤッケも白くなり、ビレイ
をしているときさすがに寒い。
そのはずなんだけど、まあそれはさ
ておいてなんだか楽しくて仕方がな
い。

ワクワク感にニマニマしながら、
「ハラ減ったねえ」などと判りきっ
たことを訴えてみたくなる。
もちろんジョークに他ならない。

あの衝撃が、あの感動が、あの覚
醒がなければ今はなかった。
あの悔しさが、あの喜びが、今この
瞬間がすべて愛しい。

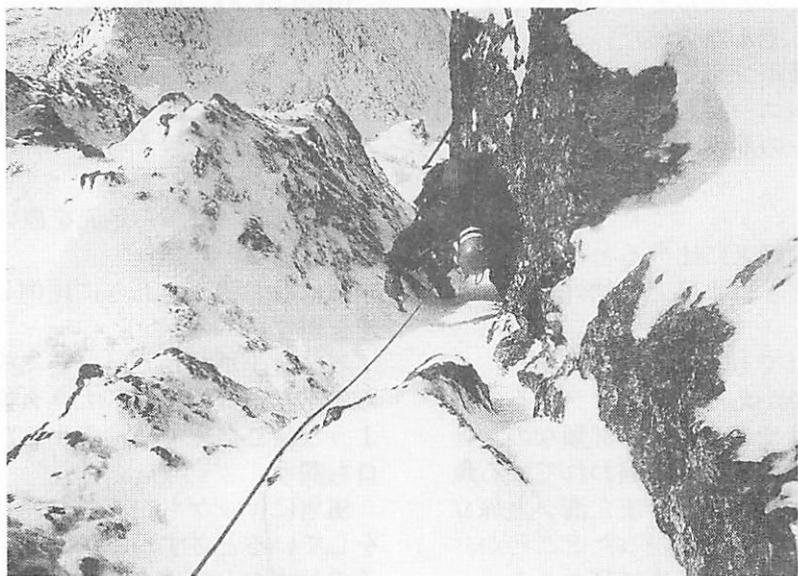
風雪が極限に感じられた頃、登攀
はクライマックスを迎えた。
ようやく念願かなってアンパンをか
じる。

下山は地藏尾根。強烈な横風を受
けながら縦走路を南へと進む。
もはや暗闇を意識しなければならな
い時間となっていた。

今思えば志向は自然に流れていった
亀足ながらどうにかこうにかでは
あったが、幾重にもガラスに囲まれ
た水槽から小川くらいまでは来た
ろうか、まだまだ先はある。涙が出
るくらい嬉しいことだ。
夜な夜な宴に酔いしれる。

またひとつ感動を知ってしまったか
ら一步前へ、また一步前へ。
そんな自分を想像しながら選んだ未
知に行く。
未来はそうして決まっていく。
一步先の未来がそこに。

(坂田 記)



赤岳南峰リッジ登攀中の菊地



石尊稜登攀中の木南

浅間山スキー

2004. 3. 14

パーティー

本図一統、笹平 孝、吉田 仁、渡辺聡子
名雪 博二 (ACC-J東京)

浅間山が噴火した。第一報を聞いたときまず思ったのは、あの時山行に参加してよかったあ、登っておいてよかったあ、ということだった。

はせつねカップで痛めた膝が回復しきらずに山行きの度に痛い思いをしていたので、浅間山スキーの計画が出たときには「今の私には山スキーなんてとても無理」と思ったのだが、本図さんと宮路さんが歩きで行くというのを聞き、それじゃわたしも行けるところまでがんばってみるか、ということで参加したのであった。

峰の茶屋わきの駐車場に着いたときは風が強くて明日は登れるんだろうかと不安になるくらいだったが、朝になると風は幾分穏やかになり空は快晴、いそいそと準備して出発。

東大火山観測所うらの林道を抜け、小浅間山との分岐までおよそ30分。ここまで来ると目の前に噴煙をあげる浅間山の全容が見えてくる。

本当はこの先登山禁止のようで、ロープが貼ってあり『立入禁止』の紙がぶら下がっていたが、それをさっくりまたいで先に進む。若干風は強いが気持ちよい天気快適に歩を進めていく。

登山禁止の山が大勢の人が登っているらしく道はぱっちりついていた。浅間山も頂上はすぐそこに見えるのになかなか近づけない、富士山と同じで行けども行けどもたどり着けない山である。

東前掛山をトラバースするあたりで吉田さんが終了宣言し、トラバースが終わったところで名雪さん、笹平さん

が終了宣言、と思ったら我々3人が頂上まで行くのを見るやいなや笹平さんが「やっぱり俺も」と4人で頂上を目指した。

この辺までくると風がいつそう強くなり、硫黄の臭いも強烈になってくる。お釜の縁にたどり着いた瞬間さらに強烈な風がおそってきた。みんなではいつくばってお釜をのぞき込む。覗いたお釜は今まで見た草津白根とか蔵王のそれとはちがいとでもおどろおどろしいものだった。

噴煙が底のほうから次々とわき上がってきて、底は全く見えずどのくらい深さがあるのやら想像もつかない。落ちたら間違いなくアウトだろうと思う。

名雪さんが待っているところまでもどり、スキー組と別れ、きた道を戻った。途中スキー組の華麗な(?)滑りを鑑賞させていただき、一足先に降りた吉田さんと合流するのを見届けてから下山を開始した。

最初はまずまずの調子だったのだが、途中からやはりきました膝に激痛。ちょっと歩いては休み、ちょっと歩いては休み、というのを続けてなんとか小浅間山の分岐までもどってきた。あとは緩やかな下り道だったので膝も痛むことなく車まで無事に降りてきた。

本図さんがスキー組を迎えに車を走らせ、無事に全員集合し軽井沢を後にした。膝の具合が全然よくなってないことがショックだった。

黒部横断、ヨーロッパはどうなっちゃうんだろうか、不安がふくらんだ山行であった。(渡辺 記)

南アルプス 光岳

2004. 3. 20～3. 21

パーティー L 本図一統、木村 一、菊地光夫

正月に光岳を目指したものの、車で易老渡に向かう我々の携帯電話に、上高地の明神にて金沢君が突然死する、との報をうけ、急遽現地向かうこととなったので延期になっていた。今回はその雪辱戦である。それに加えて、GWに予定している黒部横断に足が耐えられるかどうかのテストも兼ねている。

常磐、首都高、中央と高速を乗り継いで飯田に降り立つ。矢筈トンネル経由で易老渡に着いた。こんな山中奥深いのに舗装された駐車場があった。時間も遅いので宴会も早々に寝ることとする。

20日。なんと外は小雨が降っていて出鼻をくじかれた感じで、出発準備も気が重い。橋を渡るとすぐに急登になる。膝に負担をかけないようにゆっくり足を運ぶ。道というほどではないが、はっきりした踏跡がついている。が、完全に凍っており気をつけていてもスッテンコロリンをしてしまう。嫌気が差して途中アイゼンをつける。こんなに安定して登れるならもっと早く装着すべきだった。

そんなに重い荷物ではないが、ケガしてから、これだけの荷物を持つのは初めてである。それでもマアマ順調に易老岳に着いた。頂上の樹林帯の中に良い幕营地があったのでベースを設営した。

あと今日することと言ったら飲んで食って寝るだけだ。酒も肴も豊富で結構酔っぱらってしまった。特に肴は、菊地のお話があれば十分であ

る。2人ともクラブ創立当時の付き合いで、昔の面白い思い出話は尽きなかった。

21日。私の足のことを考え早起きしたので、準備が終わっても外はまだ真っ暗だ。昨晩は20センチくらいの積雪があったのでルートがよくわからず、空が白々するまで少々待つ。今日の天気は最高だ。遠くの山が見えてくるとルートファインディングができるので出発する。

といっても樹林帯の中で視界は限られるので迷いやすい箇所もある。地図と磁石との睨めっこしながら進む。赤布が結構あった。膝下くらいのラッセルだが、はじめちゃんはガンガン行くので後を追うのが大変なくらいだ。

イザルガ岳の斜面を左に見ながら沢状を登っていくと、開けたところを登るようになる。恐らく無雪期はガレか草原じゃないのだろうか。傾斜が落ちた所で一本とる。足の調子もマアマで空は快晴、非常に気分が良い。やがて光小屋が見えてきた。小屋は新しくとても快適そうに見えたが、寄らずに頂上を目指す。小屋から一登りで山頂に着いた。頂上標識が足元にあり、それから推定すると、積雪2メートルといったところか。

富士山を筆頭に、赤石岳、荒川三山、遠くに塩見岳らしき山が見える。聖岳がとても格好良く、登高欲をかきたてられる山で、次に登る南アルプスはこの山にしようということに話がまとまった。

ベースに戻り荷物をまとめ下山する。はじめちゃんが、下りは膝にくるからと、私の持つ分の共装も持ってくれるという。申し訳なかったが結局甘えてしまった。

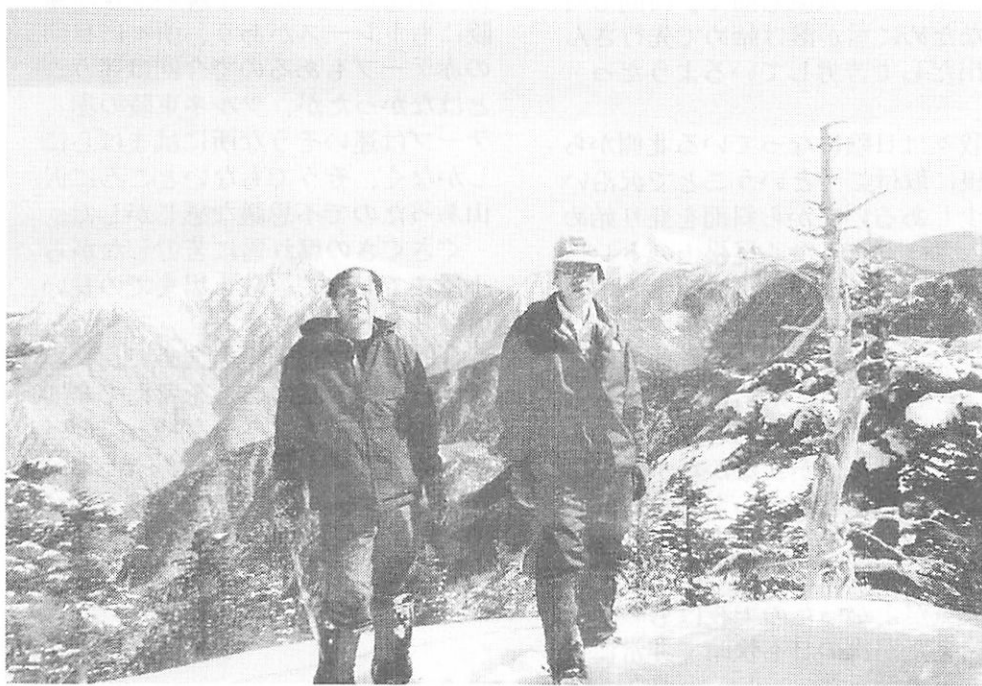
よくこんなところを登ったものだとイヤ気が差してきたころ車に着いた。この膝の調子ではGWの黒部もなんとかかなりそうだと、少し足に自信のついた山行になった。

来るときは夜だったのでわからなかったが、遠山川右岸はるか上部を通る道路には点々と集落があり、その斜面の急なこと急なこと、なぜこんなところに住んでいるんだろうと

思ってしまう。それは、農作業中転んだら谷底まで転げていってしまうのではないかと思える程の斜度で畑がある。

酔っぱらって道から足を踏み外したらもうアウトだ。私の住んでいる八郷でも、都会から来た人には「なぜこんな所に・・・」とを感じるらしい。その田舎に住んでいる私が同じように感じるのだから、それはそれは驚きの一言であつた。でも、自分がそうであるように、住めば都なんだろうと思う。

(本図 記)



南アルプス光岳頂上にて 菊地、本図

八ヶ岳旭岳東稜

2004. 3. 27～3. 28

パーティー L 笹平 孝、渡辺聡子、木南真紀子

西面は何度も行ったけれど東面の八ヶ岳は初めてである。ヨーロッパへ向けてのトレーニング山行の一つとして旭岳の東稜に登りに行った。

美しの森駐車場から見る八ヶ岳は「なんかものすごく遠いんですけど・・・」。だらだらとした道を歩くこと約3時間で出合の小屋に到着した。

この間出会った3組のパーティーはみんな「旭岳東稜」ということであった。小屋の前に小休止をしてから尾根の末端へと向かう。

天気がよく気温も高く、時間も時間なために雪が溶け始めて先行さんは出だして苦労しているようだった。

我々は日陰になっている北側から尾根に取付こうということで沢沿いに少しあるいてから斜面を登り始めた。さほど苦もなく尾根上のトレースに合流でき、その後はずっとトレースに沿ってひたすら歩いた。

テントの設営をしていた他のパーティーを見送ってからは、我々もとテントが張れるところを探しながらしばらく進んだが、なかなかよい場所が見つけれなかったのが斜面を少し切って、ならしてテントをはることにした。

天気がよかったので夜はものすごく冷えたが次の日も快晴で非常に気持ちよかった。

前日テントを上の方にはったおかげで5段の宮に一番に取付くことができた。「手袋もいらないくらい暑い」といって笹平さんが素手で登

り始め、続く木南さんも素手。コールがかかっているのぼって行くと、確かに1段目は雪が全然ないけどそれを越えると雪だらけ。笹平さんの言葉にのらなくてよかったあ、と思いながら登っていく。

ちょっと難しかったのは1段目の出だしすぐと3段目の凹角だったかな、ビレイ地点まで行くと2人とも「手が冷たい」と言っていたがそりやそうだろう。

その後は両側がすっぱりと切れたやせ尾根を3～4ピッチのぼして旭岳の頂上についた。下降のツルネ東稜にもトレースがあり、所々に目印の赤テープもあるので今回は迷うことはなかったが、ツルネ東稜の赤テープは迷いそうな所にはまばらにしかなく、そうでもないところに沢山あったので不思議な感じがした。

ぐさぐさの腐れ雪に苦労しながら小屋までおりて、駐車場までの長い道のりをもどった。

今回はアプローチも含めて長い歩きだったが、膝のことを考えてCW-Xとサポーターとストック持っていったため事なきを得た。よかったよかった。

(渡辺 記)

合同雪訓練 (ACC-J茨城&水戸葵山岳会)

2004. 4. 3~4. 4

ACC-J茨城 本図一統、木村 一、菊地光夫、渡辺聡子、坂田英希、
木南真紀子、名雪博二、水島幸男

水戸葵山岳会 川村克明、武藤泰宏、坂本康一、市村光弘、鈴木優子
安原晶子、不破茂道、渡部吉正

水戸葵山岳会の武藤さんと本図さんの尽力で、水戸葵山岳会とACC-J茨城の合同雪上訓練が上越の荒沢岳で4/3~4/4の2日間開催されました。

参加者は水戸葵山岳会から8名、ACC-J茨城から6名、ACC-J東京から2名の総勢16名。4/3の朝に上越土樽駅前に集合して魚野川の橋を渡ったところに車を置き、ここから雪の林道を10分ほど歩いたカドナミ尾根取付きの手前の雪面にBCを張る。

今年は例年に無く雪が少ないので雪上訓練の場所選定に幹事の武藤さんと本図さんが迷っている様子だったが、なんとか訓練の出来る場所を選定して合同雪訓開始。

午前中は水戸葵の会員で茨城岳連の指導委員長の川村さんから滑落停止、スタンディングアックスビレーなどの指導を受けた後、水戸葵の会員とACC-Jの会員でアンザイレンして、相互の技術を確認しながら練習を重ねた。

午後からは本図さんの指導で雪崩講習会となり、埋没体験、人が埋まった状態でのゾンデ探索、弱層テストの方法など実践しながら講義を受けた後ビーコン搜索訓練に入った。

ACC-J茨城の会員はデジタルビーコンを所有しているが、アナログビーコンとの違いが分り有意義な訓練でした。

夜は雪上で盛大な焚き火を囲みながらの懇親会となり、各自持ち上げたビールなどを飲みながら親睦を深めた。暗くなってから渡辺、木南の綺麗どころが到着し更に盛り上がった。

翌日も雨の中ビーコン搜索訓練の続きを行い、埋没者が複数の場合、チームで搜索する訓練等、実戦に近い状況設定で訓練を重ねた。帰路、温泉で汗を流し、レストラン「北国」で打ち上げ後解散となった。今回の合同雪訓をきっかけにして水戸葵山岳会とACC-J茨城の両クラブの友好関係が深まればと思いながら家路についた。

(木村 記)

川内山塊矢筈岳

2004. 4. 12～4. 14

パーティー L坂田英希 (単独)

1日目 室谷洞窟(7:20)―一の又沢橋(8:45/9:00)―太郎山(13:00)―魚止山(15:45)

2日目 魚止山(7:30)―矢筈岳(11:45/11:55)―魚止山(15:45)

3日目 魚止山(8:30)―太郎山(9:45/10:00)―一の又沢橋(11:30)―室谷洞窟(12:45)

兆候は前からあったのだ。
なぜ?と思えるココロの微妙な漣に
翻弄されるのは、まあ珍しいことでは
ない。

日和の訳はそこここに。
山に一步入ればすでに期待と後悔と
がごっちゃになって些細なことで一
喜一憂を繰り返す。

単調な登りと悪雪ですでにヘトヘ
ト。

日和っちゃうかなあ。いや、待て
よ。癒し系に日和なんてあるのか?
すでに違った方向性への自問自答に
苦しみながら、日和の道具はデポす
ることとした。

そう、私は山ヤだ。山ヤに竿な
ど、あんまり必要ないのだ。と、強
がってみる。

手元の藪を掻き分けながら「やっ
ぱ止めときゃよかったなあ」なんて
思ってみてもお天道様はピカピカ輝
く、そして手の甲には無数の生傷。
傷口は日に焼けしばらくはドス黒く
痕となる。それはそれで思い出に残
るはずで、坂田はニタニタ笑いしな
がらご満悦なのです。

梢の向こうにカモシカを見る。
その影に導かれ獣の径を行く。
時折ベッタリとした残雪の廊下にそ
ぞろ歩けばハッとするような御木に
出会える。
そう、これだ。きっとこれに違いな
い。

これに出会うために私はここまで
来た。そんな馬鹿げた思い込みだっ
てあなたが馬鹿にはできません。

またこの御木に会いに来たくな
る。そんな日が来る様な気がしてな
らないから。

幕をたたみ、いくらか雪の多く
なった稜を行く。

それでも一向に藪は衰えない。
ワサワサと闇雲に進んではとても
じゃない。

根元を見極めると扱いも少しは楽に
なろうか。

自分なりにこれらは慣れてきている
と思っではみるけれどそれでも時た
ま溜息が出る。

やがて川内のほとんどは藪に覆われ
る。

本質はそこにある。そんな気が漠然
としている。

それを見ずして、この山々を語るこ
となどとてもできない。

そして今日もお天道様はピカピカ輝
く。

それはいつもどこからともなく
やってくる。

胸に残ったひとカケラがどこともな
く引っかかって次第に熱を帯びて憧
れとなる。

今早出の源頭を歩く。

一気呵成に落ち込むこの姿は人を惹きつけるにふさわしい。

いくつもの峰を越え、いくつもの谷を見おろした。
そして頂。この深さはそこらにおいてそれとあるもんじゃない。
立派な標柱は玉に瑕だが展望といい風といい、独りポツンと佇むにはもってこいだ。

残雪輝くこの山行を紐解くときあの御木が、今早出が、矢筈の峰が、おそらく消えることはない。むしろそれらはどこともなく引かかる。

いや、もうすでに引っかかっているではないか。

あの谷に、藪に、峰に想い馳せれば時間は止まる。
憧れの本質は意外と竿先にあつたりもする。

川内の記憶。

見上げる夕暮れに月は確かに微笑んでいた。

(坂田 記)



矢筈岳を望む



荒沢岳での合同雪訓

巻機山スキー

2004. 4. 11

パーティー L木村 一、吉田 仁、
名雪博二、宮路郁子 (ACC-J東京)

気が付けば三年連続で巻機に行っていました。最初はまだボードをしてなかったの歩き。二年目は途中敗退。三年目にして、てっぺんから滑ることが出来ました。

頂上付近はトラバースでもつたいない感があるものの、ニセ巻機から樹林帯までは快適なrideができた。樹林帯からは爽快なツリーランから高度を下げるとともに雪が重くなっ

てきて板を回すのに苦労する。

そして一番傾斜のある樹林帯付近は絶悪で何度かバインを外して軌道修正が必要だった。最後はみんなバラバラになり僕は見当違いの場所に下りてしまいたいぶ歩って駐車場に戻った。今年は雪が少なめでシーズンの終わりは早いかもしれない。

(吉田 記)

会津大戸沢岳山スキー

2004. 4. 25

パーティー L木村 一、吉田 仁、木南真紀子、宮路郁子

山に向かう前夜はすごい雪で運転していると目が回っているかのような錯覚がするほどだった。

一旦弱くなったが朝になるとまた降りが強くなり少し様子を見てからの出発だった。

かなり新雪がつもって場所によっては腰までのラッセルになってしまった。最初は軽い雪だったが気温とともに重い新雪になってきて思う様に高度を稼ぐことが出来ず時間切れで途中から滑り降りることにした。

どセンター、超ダックススタンスの極悪パークセッティングの僕はノーズを高々と上げて滑らないと潜ってしまいその状態では曲がることもできず大変苦労した。

樹林帯に入ってから状態も落ち着き微妙な感覚の木を交わしながら滑り降りた。

だいぶ積もった雪も登り出しの辺りは溶けてしまい駐車場までブーツを泥だらけにして戻ることになった。

(吉田 記)

会津三岩岳山スキー

2004. 4. 18

パーティー L木村 一、木南真紀子、笹本 明（無所属）

入会前のお試し山行として笹本さんと3人で会津の三岩岳にチャレンジ。

ここは木村さんにとっては3度目の正直トライに当たるらしく、気合いいっぱいバックカントリーとなりました。いい斜面があるんだよと聞いて期待いっぱい6時に出発。あれあれ行けども行けども藪こぎ。山歩きに慣れていなそうな笹本さんは早くも息切れ。さらにやせ尾根を超えるとやっと美しいブナ林に。

遅れ始めた笹本さんを待ちつつ登っていったものの山頂へ一本道になるころには大分離れてしまい。まずは途中の無人小屋の探索に出かける。

雪にうもれかけた小屋を発見し、内部も使用可能なこと確認。天気の良い日は見つかるけど、林の中にあるので吹雪き中では発見は難しそうであった。そこから解りやすいところで待機、でも笹本さんが登って来られないので二人で頂上まで登ってしまった。

その頃10時で30分ほど山頂で待つがやはり来られない。しょうがないので滑走始める。先ほど避難小屋近くで笹本さんと再会。

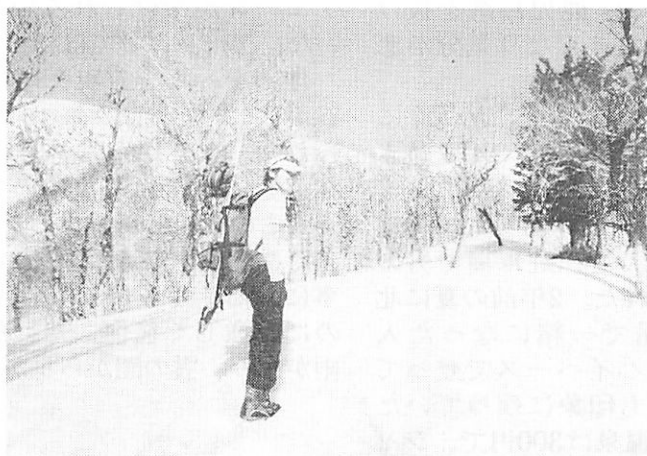
笹本さんはまだまだやる気十分なので私たちもう一度登り返すことにする。30分ほど登り返して11時くらいに再び滑走。

上部から中間部までは木々のすくない真っ白い斜面で快適でした。初めの藪こぎ付近まで滑走可能で楽しくバックカントリーを楽しみました。

ただ笹本さんは始めに足を使い切ったのか足がつってしまいつらそうでした。結局下降も私たちからかなり離れてしまい少しつらそうな山行となったようです。

3時位には車に着きましたが、なんだか空気は重かったです。そのせいかそれからは集会に笹本さんは来てはくれなくなってしまいました。とほほ。

（木南 記）



ボードを背負って三岩岳を登高中の木南

屋久島宮之浦川

2004. 4. 15~4. 16

パーティー L 笹平 孝 (単独)

茨城を出発してから12日目で鹿児島市にやって来た。この間、宮之浦川のトレーニングがてらに百名山などの山を7ヶ所登ったので、まだ少し疲れが残っている。

ここからフェリーで屋久島へ渡るのが、車の駐車料金が安いのに参った。10日間も車を停めておこななら、いっそのこと車も一緒に屋久島へ渡した方が良さそうだ。

そういえば、知人が屋久島へ行くならフェリーより貨物船の方が安いと言っていたので、ちょっと調べてから貨物船乗り場へ行ってみるか。

綺麗なフェリー乗り場とは全く違ってコンテナが所狭しと立ち並び、フォークリフトが忙しそうに走り回っていて少し不安になる。古くさい倉庫の横に安っぽいプレハブの事務所があった。

4月14日 貨物船に車を載せて鹿児島を10時に出発、乗客は8名しかいない。風が強いので、鹿児島湾を抜けると船の揺れが大きくなり気分が悪くなる。

屋久島の方は雲が厚く、近づくにつれて雨が降り始めた。14時過ぎに、どしゃ降りの屋久島に着いた。

やはり雨が多いだけあるな。近くの楠川温泉に行くと、駐車場で男の人に話し掛けられた。2年前の夏に北海道の雌阿寒岳で一緒になった人だった。お互いハイペースで登っていたので、今でも印象に残っていたようだ。ここの温泉は300円で、シャンプーなどは無い。

明日から天気が回復するので、買出しに行ったり準備を進める。宮之浦林道の途中にはゲートがあるみたいなので、ゲートのカギを借りに営林署へ行く。

営林署には分かる人が出払っていて、4月に移動してきたばかりの人しかいなかった。17時まで待っててくれと言われたが、とりあえずゲートの位置を聞くと慌ただしく資料を調べだした。しばらくすると地図を持ってきて、モチゴヤ谷にゲートのマークが付いていると教えてもらう。そこから入渓地点の潜水橋まで2キロくらい離れているが、そこまで車が行けるならカギ借りなくてもいいや。

計画書を渡して林道へ向かった。かなり荒れた宮之浦林道を、ひっきりなしに車の底を擦りながらどんどん進んで行く。林道にはお尻が白いヤクシカが沢山いる。しばらくして橋を通過しようとする、目の前にチェーンが架けられていた。おかしいな、ゲートにしては早すぎる。

地図をみると、現在地はモチゴヤ谷から4キロ手前のクロハゲ谷だ、やられた。ここから営林署まで荒れた林道に戻る気力も無いので、仕方なくここの広場に車を止めた。

てことは、潜水橋まで6キロも歩く事になる。カギ借りときゃ良かったのにと激しく後悔した。夜になると雨が止み、雲の間から星が見えた。

4月15日 長い林道歩きなのでヘッドランプを付け、5:00に出発する。この高度は220メートル、思ったほど高くない事に気付く。モチゴヤ谷に着く頃には明るくなった。ここには作業小屋が建っている。潜水橋に着くと、その名前の意味が理解できた。

ここから入渓するのだが、家に遡行図を忘れてきたので、今持っている資料といえどネットで手に入れた見にくい地形図と沢の記録しかない。まあ何とかなるさ。

とりあえず、ジャバジャバと川に入ってみる。すぐに遡行困難になり、右岸に逃げると踏み跡が続いていた。ナベカケ谷を過ぎると、右岸に大スラブが見えてくる。

マンベリ淵では1ヶ所腰まで水に浸かって進むと、第三巨石が目の前に現れた。圧倒的に大きな巨石がドンと沢を塞いでいた。ここは左側にルートがある。

ザックには予備日を含めて6日分の食料が入っているので、ロープをザックに結び空身で登る。

ハーケンが打ってあるが、腐っているので頼りないし、使い物にならない物もある。抜け口はハングした岩をA0で越えた。

この先には10mくらいの滝が現れ、左岸をトラバース。ここを過ぎると、龍王滝が現れる。この滝は上部の樋状から一気に水が落ちているので、滝の音がザーでなくショーといった感じで、消火栓のような凄い音だ。

龍王滝からは左岸のチムニーに行く。下部は特に難しい所は無かったが、チョックストーンのあるピッチは荷揚げをしないと無理そう。ロープをザックに結びチムニーを登

りだす。

垂直のチムニーを体の突っ張りであがって行く。チョックストーンの所まで来ると、頭上がハングしておりランナーも見当らないので、しばらく試行錯誤を繰り返す。

落ちたら終わりなので、なかなか一歩が出ない。ソロでここを乗越すにはかなりの勇気が必要だ。

ここは背中と足の突っ張りで移動して、チョックストーンからいったん離れ左側から越えた。このピッチで胃がキリキリ痛み出す。次のチムニーは、ホールドが多いので問題無く行ける。

チムニーが終わり樹林帯に抜けると急斜面にスラブが所々現れ、右へ右へとトラバースする。

少し登って左へ左へと沢のゴルジュに近寄ると、まだまだ上に登らなければ駄目だと分かった。

木を掴んでどんどん登ると、尾根に出た。おそらくこの尾根を降りるのだろう。確信が持てないまま尾根を下降して行く。沢が近くなると垂直に切り立っている。

いつの間にか谷沿いにガスが沸いていて、この下の沢がどうなっているのかよく見えない。

そろそろ懸垂下降だけど、ほんとにここから沢に降りちゃっていいのかな？沢の記録を読み返してもいまいち分からない。文章をルートに変換するには限界があるな。

支点の木を探していると残置シュリングを見つけたので、これで安心して降りられる。懸垂下降2回、計30mで龍王滝上の沢に降りた。

丁度12時だ、今日はどこまで行けるだろうか。ここにも滝があり、沢を横断し右岸を高巻く。滝をいくつか越えてから沢に降りた。

小高塚岳へ延びる沢との二俣では、本流が右へ直角に曲がっている。支流の沢を少し登り、右上にあるコルを目指す。

コルを越えて沢に降りると上部ゴルジュ帯になり、兩岸にはスラブが現れ始める。

上部ゴルジュ帯は、沢からすぐに右岸を高巻いた。途中で沢に降りたら進めなかったもので、登り返してまた高巻いて行く。道はしっかりしていて、歩き易いスラブのバンドがあった。

しばらく高巻いていると岩が立っていて進めなくなり、ブッシュを掴んで枝沢から沢へ降りた。

ここからしばらく沢通しに歩けるようになり、あちこちに雪溪が現れ、ひんやりしてきた。

左岸に大スラブが見えてくると、再び滝が出てくる。雪溪を利用して滝を高巻いて行くと、第三巨石と同じような5m程の壁で抜け口がハングした所がある。

ハンガーボルトが1本打っており、空身で上がってA0でハングを越した。しかし、この先の滝で行き詰まる。

兩岸はスラブの岩壁になり、雪溪が多く残っているせいか、ガスが濃くて滝が良く見えない。少し戻ろうと考えたが、急な雪溪の下りを考えると、右岸のスラブ状を登った方が良さそうだ。

しばらく3級くらいの岩が続く、ブッシュを利用しながら空身で登る。この辺の灌木は花崗岩の上に生えているので、引っ張ると根こそぎ取れたり、簡単に折れたりと生きた心地がしなかった。

10m程登っては灌木でセルフをとって荷揚げの連続で、バンドに出ても非常に悪いトラバースなので、

さらに上へと登る。

トータルで10ピッチくらい荷揚げが続いた。買って1ヶ月も経ってない新品のザックは、穴が開いたりと無残な状態になっていた。

ここで2時間はかかってしまった。もういい時間なので、ビバーク地を探すためヤブを漕いで尾根を上げる。一人が横になれるくらいの場所を見つけツェルトを張った。

4月16日 食欲がないので、何も食べずに出発した。ゴルジュが終わるまでは、もう沢に降りたくない。

沢から150mくらい上がった急な斜面を、木につかまりながらトラバースする。手強いヤブ漕ぎにトゲのあるツルがたまに現れてストレスが溜まってくる。『イタッ』手から血が出た。『なんなんだトゲのあるこのツルは!』しかもこんな急斜面で『何のためのトゲなのか聞きたいよ。』

温暖な気候のせいなのか、屋久島のヤブは密生していてかなりキツイ。少しでも歩きやすい所を選んで、下がったり上がったりを繰り返しながらトラバースして行く。

この辺りのゴルジュはとても深く、枝沢は滝となって本流へ流れ落ちていた。やがてゴルジュの末端にある二俣の滝が見えてきた。

滝を越えると傾斜が緩くなり、滝の上に降りられた。ああ、やっとヤブから開放され河原歩きになる。なんだか体が軽くなったように歩いてうれしい。

森林限界を越えると山肌はヤクザサに覆われ、本流は細い流れとなる。焼野に向かう沢を詰めると水の流れも無くなり、沢筋から離れて近くにある登山道までヤクザサ帯の中

を直進してみる。高さは胸くらいまででありほとんど進まない。

10m進んでやめとけばよかったと後悔する。ヤクザサは細い竹が密生しているので、かき分けるよりヤクザサの上を歩いた方が楽だ。50mほど進んだ所で登山道に出られた。

ここから焼野分岐は目の前にあり、ザックをデポして宮之浦岳をピストンする。雲っているが、頂上からは永田岳や海が見えた。携帯からメールを送ることも出来た。

登山道を下ると、ヤクシカが近くを歩いている。焼野分岐から新高塚小屋そして高塚小屋まで下り、小屋の横からカネオリ谷を下降する。

カネオリ谷は、地図を見た感じだと簡単そうだったので、遡行図は始めから用意してなかった。

水量が少ない内は何の問題も無く行けるが、しだいに沢が大きくなると下り難くなってきた。巨岩と滝に阻まれ、右岸や左岸を巻いて降りるしかない。途中、ヤクザルの群れに遭遇した。見た瞬間、あれがボスザルだとすぐ分かる。近づくと逃げて

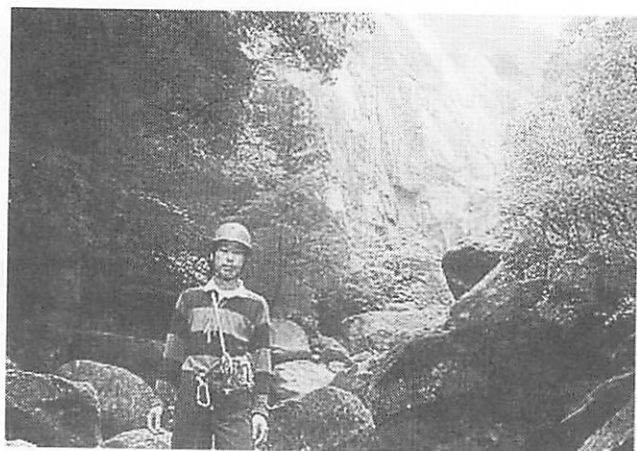
しまった。この辺で休憩しようかと思ひ大きな岩の上に座ると、やわらかい物が手に付いた。なんだこれ、クッソー。

やがて右岸の斜面が緩くなり、沢から一段上にある右岸の樹林帯の中を下った。右岸の開けた枝沢を過ぎると林道が現れた。あとはこの林道を歩いて下るだけだ。間もなく潜水橋を過ぎ、薄暗くなった頃にクロハゲ谷の車に着いた。

4月15日：クロハゲ谷のゲート（5：00）－潜水橋（6：40）－龍王滝（9：30）－龍王滝上の沢（12：00）－上部ゴルジュ始まり（13：00）－ビバーク（18：00）

4月16日：ビバーク（7：10）－上部ゴルジュ終了（8：20）－宮之浦岳（10：30）－高塚小屋（13：00）－林道（16：50）－駐車場（19：00）

（笹平 記）



屋久島宮之浦川右岸の大スラブをバックに笹平



屋久島宮之浦川龍王滝を背に笹平



屋久島宮之浦川にて笹平

黒部横断

2004. 4. 29～5. 3

パーティー L 本図一統、渡辺聡子、名雪博二 (ACC-J東京)

今年のGWは4月30日に休みを取ると7連休だ。これはがんばっちゃうしかないでしょうということで黒部横断することに決めた。

黒部横断といえば十字峡越えのルートが華なのだが膝に不安があるのでどこからでも敗退可能という保険のある扇沢～ビョウブ尾根～赤沢岳北西稜下降～丸山中央山稜～剣沢～源治郎尾根～早月尾根下降というルートを選択した。

まだ停まっている車もまばらな扇沢の駐車場でいつものように軽く飲んでから就寝、起きたときは風がかなり強かったが雲一つない快晴が広がっていた。準備をして、膝がもってくれること、無事に馬場島までたどり着くことを祈りつつ出発した。

大沢小屋の裏から本格的な登りが始まり、先は長いしゆっくり行こうと登っていく。森林限界を超えると針ノ木岳の方で山スキーを楽しむ人達の姿が見えるのが楽しかった。

ビョウブ尾根は危なげな所は全くなく、ひたすらラッセルだった。ちょうど登り切った所によいテン場があり、早めだがここで泊まることにした。

テントを張ってようやくほっとする。空はどこまでも青く雪は太陽に照らされて輝き最高の気分である。無事に一日が終わった事に感謝して就寝。

4月30日

本日も晴れ。準備をして出発。一時間の登りで赤沢岳の頂上へついた。この辺までは3人とも気分的にも肉体的にもかなり余裕であった。

3人とも北西稜の下降は2時間、かかっても3時間だと考えていたのだが、だが、実際に下ってみると雪の量が少なく非常に下りにくい。

藪をかき分けての下りになってしまうので、ルートが判然としないうちに、偵察して確認してといったことを繰り返しながらだったのだからかなり時間がかかり、結局5時間かかってようやく黒部川まで降りてきた。

かなり消耗する下降だった、おまけにこの下降中に本図さんが左膝を負傷してしまい、山行を続けることは無理だとのことである。

山行を中止するか2人で続行するかということになったのだが、現在地は黒部ダムの上流であり本図さんは1人でも扇沢まで戻れるからということで我々は山行を続行することになった。

荷物の詰め替えをした後別れ、本図さんはダムへ名雪さんと私は内蔵助平へと向かった。へろへろになった私の、『黒部ダムから内蔵助平まではトレースがあるはずだ』、という期待は見事にはずれ、非常に歩きにくいほんの少しずつ沈む雪を踏みしめながらただひたすら歩く。

空は昨日と同じく晴れわたっていたのだが味わい余裕はゼロ、早く内蔵助平に着いてテントを張りたいの一心だった。

この日の就寝時間は6時半ごろだったろうか、テントを張って水を汲んで夕飯を食べて速攻寝するという感じだったと思う。

5月1日

雲一つない快晴。4時起床6時出発。今回は沢をある程度つめて尾根に出ることにする。気温が下がらなかったせいか雪がぐさぐさで先が思いやられる。

沢をつめていると遙か前方に熊を発見。熊が我々を見つめるほうが早かったのだろう、ものすごいスピードで沢を渡り左の藪のなかへ入っていった。

熊を見送った後も2人でえっちらおっちら沢をつめ、もう少しで尾根に出るという所まで来たときに左側から丸山中央山稜を登ってきた2人パーティーを見つけた。

後から追いついてきた2人と言葉を交わしてみると丸山東壁から登ってきたという若者2人だった。私が『助かったー』と心で叫び、トレースをつけてくれることを期待したのは言うまでもあるまい。だが、だが、このおにーちゃん達は期待はずれもいいところだった。

稜にあがってしまえば富士の折立まではあとわずか、と思っていたのだが、疲れとぐさぐさの雪で思うように足が進まなかったせいもあるんだろうかその先がけっこう長かった。

稜の最後は岩と雪のミックスで、雪もほどよくしまりアイゼン、バイルがばっちりきいて快適そのものだ。名雪さんも『うほほーい』とご満悦な様子だった。

最後の最後は凹角の岩登りである。せつかく持ってきたんだし、とロープをだす。3級くらいだろうか、10m位の岩を登り、5m位のナイフリッジを渡って富士の折立に到着した。雷鳥沢のテントは去年のGWを思い出させ、竜王岳と一緒に登った松原さんや金沢さんの事が胸をよぎった。

本日は真砂岳、そして別山を越えて

剣沢を下らなければならぬ、あゝ先はまだまだ長い。名雪さんは目前まで迫ってきた念願のビールを求めて先に行き、わたしは後をゆっくりと歩いていく。遠回りして剣御前小屋経由、別な言い方をするとビール経由、で剣沢を下る。ヒステリーを起こしそうになったが、ここまできてようやく余裕がでてきた。

剣沢でテントを張っている人達を尻目に我々だけが知っている秘密のホテルへと向かう。先客がいないことを願っていたのだが、着いてみるとやっぱりというか何というか既に先客がいた。よくよく顔を見てみると去年我々の後にホテルへとやってきてはじかれた方々だった。仕方がないのでホテルの脇にテントを張って寝たのだがめっぽう風が強く、夜中に何度も起こされてしまった。

5月2日

腹が立つくらいの快晴。一日くらい雨降って停滞させてくれい、などと贅沢なことをつぶやいてみたりする。

予定では今日は源治郎尾根を登ることになっていたのだが、名雪さんが「一般道から剣岳へ登る。」というので予定を変更して剣御前の方から剣岳を目指すことになった。ここからはもうトレースばかりで右、左、右、左と足を進めれば難なく山頂にたてるはずなのだが、前日、前々日の行動の疲れからなのか結構しんどかった。

ゆっくりだけれどもほとんど足を止めなかったせいもあって割と早い時間に剣岳の頂上にたどりつくことができた。やっと着いたーといったところである。名雪さんは頂上に金沢さんの遺骨の一部を散骨し、2人で拝んだのちに早月尾根を馬場島に向けて下ることにした。

ここまできたら後は怪我のないよう下るのみである。ここも雪はぐさぐさで足を取られないように注意しながら下り、順調に足を進めて1時頃早月小屋までやってきた。

もうひとがんばりすれば今日中に馬場島まで着くのだけれど、ここまでがんばったんだしここでゆっくり山を楽しんでもいいんじゃないか、と行動を終了してテントを張ることにした。この午後はこれまでと違ったとてもゆったりとした時間だった。晴れているのに何もせずゆっくりしているなんてとても贅沢、たまにはこんなのも悪くないね。

5月6日

さて、最終日。晴れ／曇り。ひたすら下る、下る、下る。2時間位で林道へ出た。名雪さんと握手をし、山行の終了である。

林道脇にはごみ、ニンソウ、ふきのとうなどがはえており、食べる分だけ頂戴しながら本図さんの待つ馬場島まで行った。

無事に本図さんと合流し温泉で汗を流した後、富山名物「たら汁」を堪能し茨城まで戻ってきた。全日素晴らしい天気恵まれたのが幸いして扇沢から馬場島まで歩き通すことができてとてもよかったと思っている。

本図さん、名雪さん、次は十字峡ですかね、ねっ。

(渡辺 記)



蓮華温泉スキー行脚

2004. 5. 1~5. 4

パーティー L 木村 一、笹平 孝、吉田 仁、菊地光夫、中島 純
木南真紀子、江平尚志

無雪期には林道を車で簡単に入れる蓮華温泉も、雪積期に林道は雪の下なのでスキーを&スノボードを利用して入る人が多い。

ここ杵池高原山麓駅の駐車場に集合したのは、遠路九州福岡から馳せ参じた江平氏を含めて総勢7名。

ここからゴンドラに乗り杵ノ森駅へと向かい、ここからシールをつけて天狗原に向かって登高開始。

最初は粗い樹林の中を傾斜の緩い所を選びながら登ると真っ白い雪の斜面の下に出た。左方には白馬三山が眩しく輝き、最高のロケーションである。

目の前の急斜面を登りきると傾斜が落ち、露岩の上に祠がある天狗原に到着。

此处で小休止するが、正面には乗倉岳の大斜面を登るスキーヤー&スノーボーダーが蟻ん子のように一列になって見える。

蓮華温泉へは天狗原を横切り、シールを外して振子沢へと飛び込んだ。しかし、3泊4日分の食料とアルコールが入ったズッシリと重いザックのせいで快適なターンが出来ないが、スキーで滑り降りられるのは気分が良い。

振子沢の下部片斜面を斜滑降の連続で飽き飽きした頃に蓮華温泉に続く林道の橋に出た。

橋からは5分程で幕営予定地の蓮華温泉駐車場の雪の台地に到着し、2張りのテントを設営後大宴会開始。

九州福岡から馳せ参じた江平氏とは1年ぶりの再会なので話が弾む。

呑む程に、酔う程に時の経つのも忘れ延々と宴が続いた。

5月2日 翌朝5時起床、手早く朝食を胃に流し込み6時出発。今日の目的地雪倉岳が朝日に輝いて、我々を手招いている。

朝は雪が締まっているのでツボ足登高でスタート。途中からスキーを履いて斜登高や斜滑降を繰返ししながら瀬戸川の渡川点まで一気に滑降。

幸いにもスノーブリッジが残っていたので問題なく通過し、雪倉の滝目指して白い斜面を登高開始。

雪倉の滝は右側の斜面を登り、滝上につづく白い大斜面の下で大休止。後ろを振り返ると朝早く出発した蓮華温泉の赤い屋根が眼下に見えて高度が上がった事を物語っている。

此处からは笹平、木村の2名はスキーにシールを付けて白い大斜面をジグザグに登高開始。頂上直下近くなると傾斜が増してくるので、シール登高でも苦しくなってきた頃、雪倉岳の頂上に到着。

頂上からは360度の眺望が得られ、白馬岳や柳又谷の源頭部の大斜面が眩しく輝いている。北方には明日登る予定の朝日岳が手招きしている。

小休止後、雪倉岳の頂上でスキーを履き待望の滑降開始、最初にボード組の吉田・木南組が大斜面に飛び込み、スキー組がそれに続いた。

テレマークスキーの江平氏は歓声を上げて快適にスキーを回して滑降して行く。途中、中島さんと合流し大

斜面を一気に滑降したが最高の気分だ。

雪倉の滝右側の斜面を快適に飛ばし、スノーブリッジを渡った所で小休止。此处でスキーを外しザックに差し込んで対岸の斜面をツボ足で登高。嫌になった頃に蓮華温泉の天幕場に到着（14：00）。

まずはビールで乾杯。先程滑り降りた斜面を見ながらのビールは旨い。菊地も久し振りのバックカントリースキーなので舌が絶好調。ミツオワールドの世界がここ蓮華温泉に開演。

ひと時の宴の後に明日の予定を皆で話し合うが、ラジオの天気予報は明日の夕方から天候悪化を告げている。朝日岳の頂きは、今日登った朝日岳より遥か彼方に見えるので、特攻志願4名でアタックする事に決定。

5月3日 3:00起床。朝食は抜きにして3:30出発。ヘッドランプの明かりでは視野が狭く、樹林帯の中であっちに行ったり、こっちに行ったりと迷いながら兵馬の平に到着。

ここでヘッドランプを外し、瀬戸川への急斜面をキックステップで下り、瀬戸川を鉄橋で渡って対岸の樹林帯の中をひょうたん池目指して登高。

ひょうたん池の辺に天幕が1張りあり、天幕の中ではまだ朝食の真っ最中らしい。

此处からは白高地沢の一段高い右岸を登り、源流部を目指す。白高地沢の源流部は氷河を幻想させるような一帯で、最高のロケーションだ。

ここから左手の一段高い斜面に入ると、真っ白いカール状の斜面が朝日岳の頂上付近まで広がり、此处は日本？と疑うような雪の斜面が続いている。10：00朝日岳の頂上着。

朝日岳の頂上は平で広く石の案内盤がある。遥か遠くには剣岳の真っ白い雄姿が聳え立ち、日本海に向かって早月尾根が長く伸びている。

今頃名雪パーティーはどこら辺を下っているのかな……。

頂上で小休止後、お楽しみの大滑降開始。今日もテレマーク組の江平、木村組は絶好調。ボードの木南も快適な弧を描きながら下っていく。

真っ白いカール状の斜面が今日是我々のものだ。アツと言う間に吉田君との待合せ場所で合流し白高地沢の右岸を斜滑降気味に下るが、ボード組は苦勞している様子だ。

瀬戸川を鉄橋で渡り返し、対岸の急斜面を喘ぎながら登り、湿原状の兵馬の平で小休止後蓮華温泉に到着。15：00。今にも泣き出しそうな空からポツポツと雨粒が落ちてきた。明日は雨の中の下山になるだろう。

5月4日 昨晚相談した結果、雨の中天狗原への急登は避けたいとの希望が多かったのも、木地屋部落へ林道を下り、木地屋集落からタクシーで拇池高原スキー場の駐車場に戻る事にし、激しく振る雨の中天幕撤収開始。

下山開始前に蓮華温泉から電話を借りてタクシーを予約して下山を開始したが、これが間違いだと気付くメンバーは誰一人としてこの時点ではいなかった。

最初の頃はたいして急な登りも無いので、一向に止む気配の無い雨足の中順調に歩を進めていたが、蓮華温泉をスタートして3時間を過ぎる頃から、タクシーの予約時間までには木地屋集落まで下れない事を感じ始めていた。

仕方が無いのでスキー組が先行してタクシーの予約時間までに木地屋

集落まで下降し、タクシー事情を説明する事にした。

やはり、傾斜の無い林道の下降にはスキー有利が一目瞭然で、ボードは全然滑らず1歩々歩くしか術がなかったので、つらい逃避行になったと思う。なんとかタクシーの予約時間までにスキー組は木地屋集落までに下降する事が出来たので、タクシー1台は先行して拇池高原駐車場に向かって頂

き、木村は後続を待って一緒にタクシーで後に続いた。拇池高原スキー場リフト乗場隣の風呂に入り、暫く談笑後江平氏と別れ帰路に付いた。江平氏は明日天気良ければ白馬大雪溪に行くとの事。相変わらず元気である。

(木村 記)



雪倉岳滑降中に一休み
吉田、中島、菊地、江平、木南、笹平



テレマークターンの木村

秩父入川真ノ沢

2004. 5. 11～5. 13

パーティー L 笹平 孝、坂田英希

今年もこの季節が来たのです。
当たり前なんだけど、とりあえず感謝。

久しぶりの沢靴にまだ見ぬ魚影を
想う。そして、「何とかの犬」のよ
うに条件反射。

いやあ、いい季節ですねえ。
林道ゲートからコロコロ歩く。
赤沢吊橋からはてくてく歩く。
しばらく歩く。

柳小屋は超上質の避難小屋。
中には釣師のデポ品があつて、調味
料や油、刺身包丁まで充実してい
る。
笹平さんから「テン普拉できます
ね。」と嬉しい提案。
その言葉に触発されて、さらに物色
をしていると、笹平さんが「コンニ
チハー」と誰か来たかのような振舞
い。瞬間、坂田は凍り付き、恐る恐
る顔を上げると笹平さんが独りニマ
ニマしていた。
不覚っ！！！！

柳小屋の傍ら、川原で身支度を整え
て半年振りに沢に行く。
すぐに真ノ沢出合。

「通らず」は通らず(!)、魚止め
の落ち口まで巻く。

その後、取り立てて印象深いところ
はない。と言いますか、何といいま
しょうか。

小滝の釜やら淵やらのポイントがそ
れ以上にとっても気になりまして。

多分眼が訴えていたのだと思いま
す。

「じゃあ、この辺から釣りあがりま
すか」と笹平リーダーのお言葉。
早々に竿を出すことにさせていただ
きました。

「きた、きたあー」
シーズン最初のアタリに思わず声
が出てしまいました。

今夜のおかづゲットだぜっ！
ということでかなりの時間を釣りに
要して千丈の滝手前で幕。
さらに上下流に分かれてまたも釣
り。

二人あわせて10尾。
豪快な焚き火の傍ら、各々つまみも
含めて豪勢なディナーを彩ることと
なりました。
もちろん、普段以上に杯は進み酩酊
状態で意識が遠のくのです。

明けて、今日もいい天気。
今日は昨日の遅れを取り戻そうとビ
シッと遡行に専念します。
千丈の滝を巻いて木賊沢を左に見送
り、その後いくつかの滝をやり過
す。

木の根を頼りにゴボウで上がった
所は面白かったが、それ以上にフカ
フカのコケに覆われたやさしい森の
印象が深く残った。

ほぼ水線を遡り、荒川源流の碑。
そして甲武信小屋、甲武信岳。
真ノ沢道は荒れてはいるが要所に赤
布もあり歩ける。黙々と下り千丈の
滝へと戻ってきた。

時間の目処も立ったのでそこから
先、山菜採りとなりました。
さすがです。笹平リーダーは歩きな

がら山菜を発見。

サッカーでいえばキラーパスのようにピンポイントでコシアブラを発見するのです。

眼力のない坂田は呑気に「わああい」と幹をしらせお手伝い。労働力で収穫の分け前をいただくのでした。

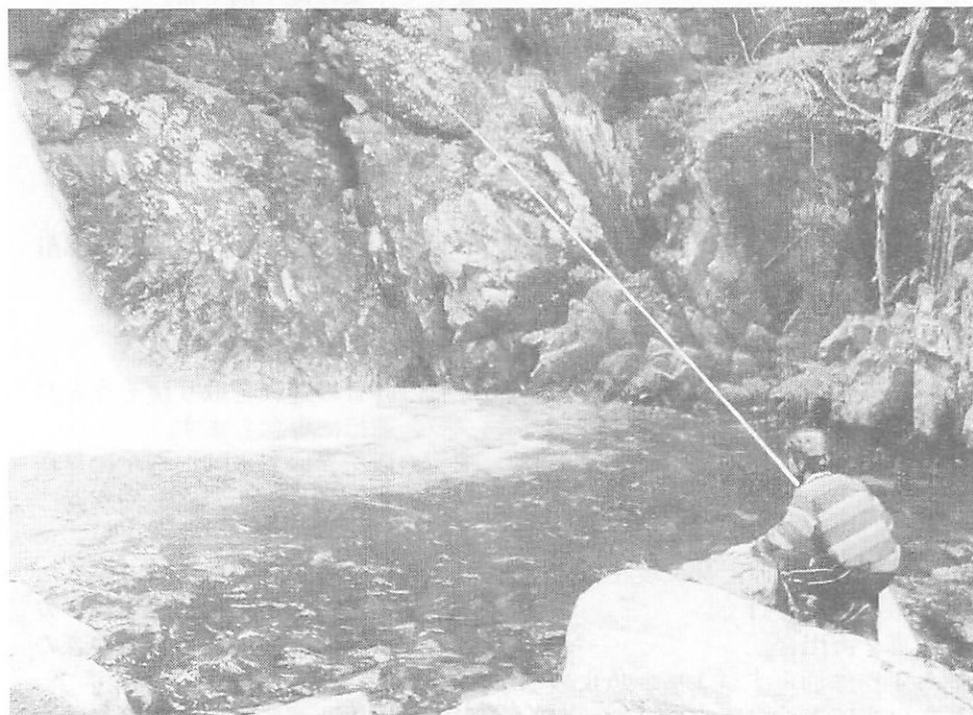
ということで、柳小屋にて泊。初日は魚、二日目は山菜でディナーを彩ることになりました。小屋には先客があり、残念ながらテンプラは慎みました。

さすがに真面目な二人。常識人とはそういうものです。(笑)

笹平さん、今度はサラダ油持参で正々堂々テンプラしましょう。そして日は暮れ、今日は今日もで、普段以上に杯は進み酩酊状態で意識が遠のくのです。

下山は往路を忠実に戻る。赤沢吊橋まではてくてく歩く林道ゲートまでコロコロ歩く途中、二度目の不覚っ！むむむ。リベンジを誓う坂田でした。

(坂田 記)



食料調達中の坂田

げろげろ高度順応トレーニングin富士山

2004. 5. 22～5. 23

パーティー L 笹平 孝、渡辺聡子、木南真紀子、名雪博二 (ACC-J東京)

生まれてこの方富士山に登るのは初めてでした。いやーあの山は見るもんで登る物じゃないよ。と先輩方に聞くものの実はわくわくしていました。

折角登るなら滑り降りようとバックカントリーの準備をして富士宮口登山道新五合目の駐車場で仮眠。周りには天体観測とアベックで一杯でした。

朝になりさあ登るぞと山頂を見上げると殆ど雪は見えず。あれー？となりました。滑り降りる雪はない。ということで急遽スキー用具は車に置き登山になりました。

その日の天気は曇り空。登っても登っても周りの風景や景色は変わらず退屈した頃8合半くらいで雪渓が見え9合過ぎたころから雪道になりました。

天気も雪と変わり、頂上付近は吹雪となりました。登るのもいつもより息切れし疲れやすく、うーん？と思ってました。頂上の神社にテントを張り、いつものように宴会。

ふーとしながらビールを2本飲みました。するとだんだん気持ち悪くなって、晩ご飯が途中で食べられなくなってしまいました。少し戻しもしてしまいました。

頭や気分が悪くなるのは私だけでなく笹平さんもでした。これが高山病？その時始めて高地でのクライミングの難しさを実感しました。また高所とお酒の相性の悪さ。たばこコーヒーもいけないそうです。

山登りとしてはきついだけであまり楽しくはなかったもののとても勉強になった山行でした。

(木南 記)

黒谷川西実入

2004. 6. 8～6. 9

パーティー

坂田英希（単独）

その場所は黒谷の流れを遡り、南会津の背稜ともいべき朝日一駒山群にあるらしい。

黒谷川の源流、西実入の支流を詰めると、どうやら出るらしい。

決して興味本位で行ってはいけません。いったい何が出るのか、どんな体験をすることになるのか？

それは行ってみないとわかりません。

すべては自己責任でお願いいたします
坂田は責任を持ちかねます。

もう一度警告しておきます。

決して興味本位で行ってはいけません。

生憎の雨。

意を決して流芯を渡る。

水嵩を増した流れはまるで憎悪の表情である。

おどろおどろしい光景に加えてあちこちで大きな蛙たちの産卵シーンを目撃する

そういや蛙ってどこぞの国では悪魔の使者だのと忌み嫌われているらしい。

そんなことを聞いたことがある。

ホントかどうか良くわかんないけど、ここはまあそういうことにしておく。

この先、ホントに大丈夫だろうか。

とても不安である。

大体、ホラーは好きじゃないのだ。

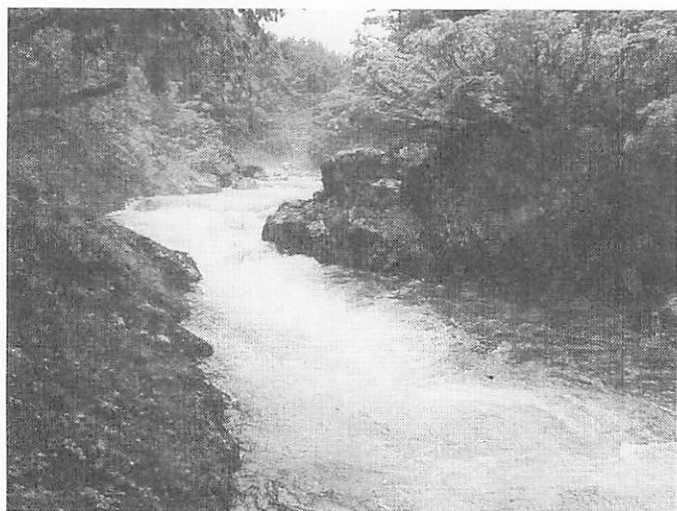
胸に迫る悪寒は決して偶然ではありません。

御霊の宿るその森に畏敬し今日のところは引き上げる。

その場所はその先にあるはずです。

決して興味本位で行ってはいけません。

（坂田 記）



黒谷川 Photo by SAKATA

特別寄稿 “きよしちゃんの思い出”

山の会のみなさん、ほんとうにありがとうございました。

雪が解けたら現地に行こうと思っていました。とは言っても、もう四半世紀も山から離れておりましたので果たして現地まで辿り着けるのか……心配でした。

5月末に名雪さんから「おい！行くぞ」と電話をいただきました。

ついて行く自信はまるでないので「どうしよう……」と一瞬困惑しました。

「行くときはひとに頼らずひとで行こう」と決めていたのに、口からでたのは「はい、お願いします」

でした。嬉しかったです（名雪さん、電話切ったあと泣いちゃいましたよ）。

その後しばらくPCの調子が悪くMLを見れずにいたのですが、山行が近づいたある日、開いてみておどろいてしまいました。こんなに大勢のかたが一緒に行ってくださいとは。感激で言葉を失いました。ほんとうに嬉しかったです。

私も仕事をもっている身ですので、みなさんの日常の忙しさはよく理解出来ます。ですので、こちらが勝手に決めた日程に、こんなにもたくさんの方たちが心を寄せてくださったこと、感激の極みです。ありがとうございました。

懐かしい河童橋から明神、そこからの登りを「きよしちゃんの登り」を追体験する気持ちで一步一步と歩をこびました。現地に着き、想像を超えた勾配に胸が詰まりました。

名雪さんはじめみなさんの遺体搬出の困難さは……。山の仲間の熱いメッセージがあらためて伝わってきました。そして、どなたも怪我をせずにはほんとうに良かったと思いました。

「仲間の皆さんに思いっきり迷惑かけたけど、きよしちゃんいいところで死んだね、仲間と一緒に幸せだったでしょう？」

将来を（ふたりで）どう暮らしているかと具体的に考えたことなどなく今まででしたが、ひとりになった途端にその答えを自分に問いただそうとするもうひとりの自分がいます。

今は何も見えていません。ただ、きよしちゃんが突然（ほんとうに突然）逝ってしまっただけ半年、様々な出会いがありました。ひとつひとつがこころに残るその出会いの経験のなかで、これから大切にしていきたいもの、目線の先に何を見ようとしているかが少しずつ解りかけてきています。

「出会いはひとを豊かにし、別れはひとを深める」……日々私を支えてくれている、たくさんの友人のなかのあるひとの言葉です。素晴らしい出会いは生きているからこそ出会える。生きている「今」を大切に大切に生きようと思います。きよしちゃんから学んだ真実です。

この度の慰霊山行は素晴らしい出会いでした。私はもとより、娘のるりにとっては一生の財産となったはずです。

「お父さんって、あんなにいいひとたちといつも一緒だったんだね、良かったね」こう言える娘って、（お父さんは居ないけど）誰にも負けないくらい幸せな子だと確信出来ます。

娘のこの素晴らしい出会いに感謝します。これからの人生のなによりのこころの支えになるに違いありません。

いつもM/Lを見るのが楽しみです。これをみているとみなさんの生き生きした山への「想い」が伝わってきます。

水島さん、本図さん、そして阿部さんも足の様子は大丈夫でしょうか。無理をしていただき、申し訳ありません。

機会を得て、またいつか楽しい山行をご一緒させていただけると嬉しいです。

この度はほんとうにありがとうございました。

かなざわ れいこ



1996年1月北穂高岳滝谷登攀中の木村、金沢

特別寄稿 “岳友金沢清との腐れ縁”

岳友、金沢清と初めて会ったのは、高校2年生2学期(1965)の中央学院山岳部であった。

暗い階段下の部室で、浅間山域の黒斑山山行計画の時が最初の出会いだっただと思う。山岳部は、普通科、商業科と合同の部で部長は商業科の実房、副部长が普通科の金沢清であった。

その頃の金沢清はおとなしくそんなに目立つ性格ではなかった。実房から紹介されても強い印象は無く、私とほぼ同時入部した松沢研一(後、穂高奥又白北壁にて遭難死)の印象のほうが強かったと記憶している。

もうその頃に金沢達は、2月には北八つの黒百合、高見石の冬山、表丹沢新茅沢の沢登りを経験していた。この年の3月に山岳部春山合宿が行われこれが金沢との初めての山行であった。有意義な春山合宿も無事終わり、下山先の渋ノ湯にてみんなで湯に入った時に金沢清の人間性にふれて、金沢、松沢、私が意気投合し合っただけで、山行を共にする事となった。

その頃の金沢清の先進性は、たぶん家庭環境に大するところが有ると思われる。松沢は二人兄弟で上に姉、私は、三人兄弟の長男で下に妹二人であったが、金沢は、年の離れた兄、姉がいる末っ子であったから発想、行動が私たちより大人びていた。

新学期より、山行回数が増え表丹沢の沢登り、そして夏合宿は槍穂高涸沢定着合宿と進んだ。

その頃よりスポーツ店巡りが3人で始まっていた。特に、学校に近い人形町の「たにがわスポーツ」へは学校帰りに良く通った。『この頃ACC-J入会の誘いが会ったそうで、入会していたな

らば中野さんより先の入会だった。』と金沢清談。

その頃、高体連では高校生は冬山、岩登り等は禁止令が出ており、また中央学院山岳部においては3年前に事故を起こしていた。

その年の早秋頃、『金沢の行動がおかしい』『変わってきた』、松沢と私が感じ始めてきたので金沢を部室に呼んで問い詰めた処、『夏後半頃から社会人山岳会に入会し南アルプス縦走、三ッ峠で岩登りをやっている』との事であった、早速我々2人も入会させてもらって、金沢に遅れずと三ッ峠、富士山冬山訓練と進みこの年(1967)正月に南ア白根三山往復縦走を行ったが、まだ3人は高校生であった。

金沢と松沢、私3人が入会した東京聖峰会はかつては、北岳バトレス研究、冬の奥又白を目指した山岳会で、この当時実にオーソドックスな山岳会であった。当時流行りつつあるアーティフィシャルクライミング(人工登攀)に疎く、この会にいたならば時代遅れになると感じ、いつしか会を離れるようになってきた。

3人でのゲレンデ山行通い、奥多摩のつづら岩、マコ岩、越沢バトレス等を共に良く通ったものでした。

その頃良く読んだガストン・レビュファの「星と嵐」、ワルティ・ボナティの「我が山々」、松沢が好きだった松浪 明の「風雪のビバーク」、私の好きなジャン・コストの「若きアルピニストの魂」そして、金沢が好きだった古川純一の「わが岩壁」、そして、山岳技術バイブルとして羨望のガストン・レビュファ著「岩と雪」などにあこがれ

スタイルを真似たモノであった。

その頃3人は、別々の山岳会に所属していた、松沢は元の東京聖峰会に戻り、金沢は富士宮山岳会の東京支部、私は、東京緑山岳会とそれぞれの道へと進んでいた。

この年(1968)正月に金沢とのパーティで稲子岳南壁中央壁オーバーハングルートその他を登った。

この年の春4月第2週に久しぶりに3人集まり三ッ峠にて岩登りトレーニングやったおり、先端を行っていた松沢(この年正月北岳バットレス第4尾根敗退。3月に赤岳センターリッジを登っていた。)に三ッ峠の岩場概要を案内してもらい、オーバーハング乗越トレーニングなどを行った。五月連休前なので三ッ峠のゲレンデは非常に混んでおり、当時の最先端山岳会の多くがトレーニングを行っていた。

J ECC、J MCC、GHMJ 等等である。そこで、驚きの女性クライマーが居て我々3人が仰天しまった事があった。地蔵ルートをあつという間に登ってしまったのである。後でわかった事だが、マッターホルン北壁を今井通子と登った若山美子その人であった。

余談はさておき、この年(1968)5月1日に松沢が前穂高岳北壁において遭難死してしまった。北壁登攀中トップが一抱えの浮き石と共に墜落し、つるべ状に落ち最後にバウンドしてトップは雪の上に、松沢は岩の上に落ちて生死が分かれてしまった、およそ300mの墜落であったとの事。

金沢は、南アルプス赤石岳山行中に松沢の夢を見たそうです。私は同時期に穂高涸沢に居て下山中に後髪引かれる思いで下ってきた思いがありました。松沢は上高地 木村小屋裏で茶毘に臥された。この山岳事故以後、上高地に於いての茶毘は行われ無くなったのです。

1969年春頃に、金沢はACC-Jに入会したと思う。まだ、私はこの頃GHMJに所属していたが、ACC-Jの存在は八ヶ岳西壁日帰り山行活動、甲斐駒赤石沢奥壁事件等で耳にしていた。そのACC-Jに金沢が入会していた。

この年は自分が目標としていたアイガー北壁が、日本人の多くに登られてしまった年であった。また、アルプス三大北壁、その他も多く日本人クライマーに登られた。自分の目標、GHMJでの行き詰まり感などで落ち込んでいた時期であった。

GHMJをこの年の秋に退会して金沢の紹介でACC-Jに入会した。金沢はACC-Jの水に会ったのか、生き生きしていた。

この頃始まっていた明星山P6南壁ACC-Jルートの開拓などで輝いて見えたものだった。

たしか、この年(1970)の正月合宿は、甲斐駒摩利支天南壁で中央壁が本図、富樫パーティ南山稜が松原、吉田で、金沢、鈴木パーティは、どこへ行ったか記憶に無い(笑) 本図さんが知っているかも・・・

正月合宿も無事終わってこの春に本図氏がヨーロッパへ行き、この年の秋に明星山P6南壁ACC-Jルートを富樫、吉田、金沢、阿部で初登してしまった。

1971年春金沢、富樫、鈴木でヨーロッパへ行く事になった。富樫、鈴木は、めざましい登攀を行ったが、どう言う訳か金沢は冴えなかった。約1年半ヨーロッパ生活は、金沢にとって厳しいものであったようだ。

この金沢、富樫、鈴木が居ない間に、新しい人物が入会した。本図さん紹介で、ヨーロッパ帰りで、ピッツパデレイ北東壁を登った名雪氏である。

この年の夏合宿より入会して、正月は北岳バットレス中央稜を登った。

1972年5月頃だと思うが、突然に金沢が帰国してきた。ヨーロッパで苦労したのか、一皮も二皮むけたのかこれまでも違った金沢に成っていた。その後は、皆さんが知っている金沢・・・清ちゃん、清である。

私と金沢清との付き合いは、高校生の17才より中高年の55才まで34年間であった。

青春時代の金沢と私の腐れ縁をお話して、その中にACC-Jとの関わりを書きました。

クラブに入会前の金沢の事を簡単ですが思い出すまま書き、クラブ入会後も思い出すまま書いたので時代背景等に違うところが在れば、訂正していただきたいと思います。(各自の判断で訂正) 金沢の出会いから金沢が名雪氏の出会いまでを取りまとめ簡単に書きました。

金沢清のエピソードはいろいろ数多くありますが、それは各個人で心に思い留めて頂ければありがたいと思います。

(吉田信一)



明神岳東稜にて (1974年5月) 金沢、寺田、阿部、名雪



赤石沢奥壁登攀後駐車場で息う木村、名雪、金沢

《 友 好 山 岳 団 体 の 月 報 、 会 報 、 そ の 他 》

ありがとうございました

月報

- ◎ Rohman NO. 223 2004. 1 B5 12P 浦和浪漫山岳会
帝釈・荒海川本流～荒海山、上越・茂倉新道～茂倉岳～武能岳西尾根、
西会津・神籠ヶ岳、南会津・長須ヶ玉山ほか
- ◎ Rohman NO. 224 2004. 2 B5 10P 浦和浪漫山岳会
南会津・佐惣沢右岸尾根～長須ヶ山スキー、上越・平標山、小出俣山大ゼノ尾根ほか
- ◎ Rohman NO. 225 2004. 3 B5 21P 浦和浪漫山岳会
冬の集中・南会津・山毛櫛沢山、明神ヶ岳・栗山沢左岸尾根、上越・仏岩トンネル
パーキング～赤谷峠～三岩山、仙ノ倉山ほか
- ◎ まほろば NO. 1 2004. 4 B5 12P まほろば山岳会
上越・平標山～仙ノ倉山、南会津・白身山、日和田岩トレ、下田・栗ヶ岳ほか
- ◎ まほろば NO. 2 2004. 5 B5 40P まほろば山岳会
越後・向松山～茂松山～あおり山～権現堂山～米沢、越後・阿寺山～高倉山、
下田・栗ヶ岳、上越・白毛門、十二社ノ峰～小出俣山～阿能岳、
春山合宿・越後・毛猛山～末丈ヶ岳周辺ほか
- ◎ まほろば NO. 3 2004. 6 B5 34P まほろば山岳会
山菜山行・南会津・湯の岐川周辺、渡渉訓練・館岩川、奥秩父・雁峠、
南会津・渡沢左俣～枯木山～赤岩沢、棒目貫～沼ノ峠山～上田ダム、
会越・楸沢～沼ノ峠山ほか
- ◎ まほろば NO. 4 2004. 7 B5 12P まほろば山岳会
奥武蔵・生川大持沢、奥秩父・和名倉沢、笛吹川東沢・鶏冠谷右俣、
南会津・山毛櫛沢山、蓼科山ほか
- ◎ わらじ NO. 574 2004. 1 B5 22P わらじの仲間
冬合宿・蛇子沢尾根～荒沢岳～中ノ岳東尾根～中ノ岳～八海山ほか
- ◎ わらじ NO. 575 2004. 2 B5 14P わらじの仲間
越後・駒ノ湯～家ノ串尾根～駒ヶ岳～滝ハナ沢右岸尾根～大ビラヤス右岸尾根～
荒沢岳～銀山平、銀山平～中尾根～花降岳～荒沢岳～魚止沢右岸尾根～滝ハナ沢
右岸尾根左岸尾根～駒ヶ岳～大湯、小倉山～駒ノ湯～大湯ほか
- ◎ わらじ NO. 576 2004. 3 B5 14P わらじの仲間
妙義・星穴岳、上州武尊山スキーほか
- ◎ わらじ NO. 577 2004. 4 B5 20P わらじの仲間
飯豊・焼峰集中、仙ノ倉北尾根、万太郎谷スキー、越後・下銅倉沢スキーほか
- ◎ わらじ NO. 578 2004. 5 B5 32P わらじの仲間
追悼・なだれ事故から一年を振り返って、平ヶ岳ワンデイスキー、栗駒山スキー、
至物山西尾根、焼峰山・松ノ木尾根ほか
- ◎ わらじ NO. 579 2004. 6 B5 24P わらじの仲間
北ア・不帰山峰B尾根、飯豊・蒜場尾根～大日岳～門内岳～赤津山～二王子岳、
地藏岳～飯豊本山～牛首山～大日岳～烏帽子岳～長者原、和賀・薬師岳～和賀岳～
朝日岳～モッコ岳、燧岳、飯豊・滝谷～焼峰山、奥飛騨・沢上谷と荒城川、
澄川～北桑川スキーほか

- ◎わらじ NO. 580 2004. 7 B5 20P わらじの仲間
春の集中報告・会越・日尊ノ倉山、山菜山行・叶津川芳沢ほか
- ◎わらじ NO. 581 2004. 8 B5 16P わらじの仲間
渡渉訓練・丹波川、阿武隈川本谷、甲斐駒ヶ岳・黄蓮谷～尾白川、
北ア・金木戸沢双六谷～九朗右衛門谷ほか
- ◎さわぐるみ NO. 16 2004. 1 B5 24P グループ沢胡桃
丹沢・玄倉川ザンザ洞本谷、二の沢、奥多摩・小坂志川ウルシゲ沢右俣、
雪山訓練・ハヶ岳ジョウゴ沢、丹沢・水無川セドノ沢左俣、北信・斑尾山、
八幡平ほか
- ◎さわぐるみ NO. 17 2004. 2. 3 B5 14P グループ沢胡桃
たかつえスキー場～保城川、上越・土樽周辺、丹沢・中川川下棚沢、
グランデコススキー場～西吾妻山～二十日平ほか
- ◎さわぐるみ NO. 18 2004. 4. 5 B5 32P グループ沢胡桃
上越・タカマタギ、奥多摩・北秋川月夜見沢ヒイラギ沢、南会津・横山～
神籠ヶ岳、三岩岳、丹沢・四十八瀬川勘七ノ沢、頸城と戸隠、
丹沢・谷太郎川大小小屋ノ沢、丹沢RCT、奥武蔵・谷津川本谷、
大菩薩・小菅川本谷、妙高・高谷池周辺、小常木谷レスキュー、
奥多摩・日原川倉沢谷長尾谷、奥多摩・鷹巣谷ほか
- ◎さわぐるみ NO. 19 2004. 6 B5 32P グループ沢胡桃
奥多摩・多摩川入川谷、大峰・白川又川、飯豊・石転び沢～梅花皮小屋、
丹沢・玄倉川女郎小屋沢、山菜・大源太山、大菩薩。葛野川小金沢大菩薩沢、
奥秩父・一之瀬川大常木谷、奥多摩・日陰名栗沢ほか
- ◎さわぐるみ NO. 20 2004. 7 B5 18P グループ沢胡桃
奥秩父・小常木谷、大洞川井戸沢、鶏冠谷左俣三ノ沢、谷川・大源太川北沢、
南八幡平・葛根田川ほか
- ◎Next! NO. 97 2004. 1 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん
北上川・胆沢川小出川ほか
- ◎Next! NO. 98 2004. 2 B5 18P 山岳溪流釣り集団むげん
つづら岩、津軽の温泉めぐりほか
- ◎Next! NO. 99 2004. 3 B5 16P 山岳溪流釣り集団むげん
加賀志山岩トレほか
- ◎Next! NO. 100 2004. 4 B5 10P 山岳溪流釣り集団むげん
仲間の近況報告ほか
- ◎Next! NO. 101 2004. 5 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん
GW秩父集中廻行ほか
- ◎Next! NO. 102 2004. 6 B5 20P 山岳溪流釣り集団むげん
奥秩父・荒川滝川水晶谷、女川廻行ほか
- ◎とまのかぜ NO. 134 2004. 1 B5 12P 童人トマの風
丹沢・勘七の沢、春日ルンゼ、谷川雪上訓練、茂倉岳、八方尾根ほか
- ◎とまのかぜ NO. 135 2004. 2 B5 39P 童人トマの風
金城山、戸台川アイス、南会津・小白森山、春日ルンゼ、奥武蔵ハイキング、
奥利根・刃物ヶ山～巻機山、八甲田山、守屋山、荒沢山カドナミ尾根、

- 黒法師岳、丸盆岳、蔵王・不忘山スキー、八ツ・阿弥陀岳南稜、
西上州アイスクライミング教室、芦安・上荒井沢ほか
- ◎とまのかぜ NO.136 2004.3 B5 60P 童人トマの風
茂倉岳北西稜、頸城・杉の原スキー場～妙高山、金城山北尾根、
越後・権現堂山、尾白川氷、荒川出合3ルンゼ右のナメ沢、
2ルンゼ正面の大滝、松木沢、西上州相沢、越後・大割山北東尾根、
西上州・神流川悪谷アイス、八海山、薬師岳、二口山塊、北陸・猿ヶ馬場山、
取立山、八ツ・西面クライミング、八海山・マス沢左稜、ニセコ、十勝周辺、
越後・割石右稜、根子岳テレマークほか
- ◎とまのかぜ NO.137 2004.4 B5 54P 童人トマの風
東北・禿岳集中、八ツ・旭岳東稜、神流川アイス、一の倉沢一の沢左稜、
湯檜曾川赤倉沢スキー、八海山生金沢左稜、巻機山、南会津・三岩岳～坪入山
～丸山岳～山毛櫨沢山、金城山水無尾根、頸城・鉢山、昼間山、
越後・神楽峰スキー、虎毛・軍沢山スキー、足拍子・クロガネの頭北尾根、
上州武尊山・荒砥沢、奥秩父・犬猿の大滝ほか
- ◎とまのかぜ NO.138 2004.5 B5 46P 童人トマの風
越後・浅草岳ムジナ沢スキー、巻機山スキー、駒ヶ岳小倉尾根スキー、岩手山、
三ツ石山スキー、上越・威守松山尾根～柄沢山、西丹沢・西沢権現沢、
筑波北方連山縦走、甲州・蜂城山～大久保山、鹿島槍ヶ岳東尾根、
中ア・三ノ沢岳南西尾根～スヤマ尾根、針の木雪渓スキー
、北海道・日帰りスキー4連発、荒沢岳スキー、奥多摩・シダクラ沢、
越沢バットレス、頸城・北面台地、アケビ平～阿弥陀山～昼間山、
西丹沢・石小屋沢、ザンザ洞二ノ沢、中川川・モロクボ沢雷木沢、
白馬岳主稜、三つ峠ほか
- ◎とまのかぜ NO.139 2004.6 B5 70P 童人トマの風
小窓尾根～剣岳、笠ヶ岳スキー、穂高岳沢、涸沢、雪倉岳、八甲田スキー、
飯豊。蒜場尾根～大日岳～門内岳、越後・丹後山～巻機山、鳩待峠～平ヶ岳～
巻機山、南紀・黒蔵谷、奥秩父・東沢釜ノ沢、月山スキー、虎毛・江合川保呂
内沢西股沢、奥多摩・青岩谷、竜喰谷、小川山、只見・真奈川芳ノ沢～赤崩沢
～中ノ又山、神室・江合川軍沢川、両神・野栗沢小丸沢、丹沢・伊勢沢、
エビラ沢、会越・蒲生川大白沢～真奈川、海谷・金山沢スキー、
奥多摩・日原川鷹巣谷ほか
- ◎とまのかぜ NO.140 2004.7 B5 36P 童人トマの風
6月の会山行・南会津・黒谷川へ8パーティ、上州武尊山・武尊沢、
丹沢・中川大滝沢、八幡平・秋田駒ヶ岳～乳頭山～大深岳、
栗子・中津川、船形・大倉沢笹木沢、男鹿・大蛇尾川西股、
那須・阿武隈川南沢ほか
- ◎すずらん通信 NO.274 2004.1 B5 9P 鈴蘭山の会
野沢初滑り、尾瀬・至仏山スキー、上州武尊山、平標山スキーほか
- ◎すずらん通信 NO.274 2004.2 B5 9P 鈴蘭山の会
八甲田、山毛櫨沢山、高畑山ほか

- ◎すずらん通信 NO. 275 2004. 3 B5 9P 鈴蘭山の会
雪崩講習会・三田原山、乗鞍連峰・十石山、北ア・焼岳、霧積温泉アイス、
梅峰・飯森山、上州武尊山・中の岳まえ、前武尊山荒砥沢スキー、
浅間山スキーほか
- ◎すずらん通信 NO. 276 2004. 4 B5 12P 鈴蘭山の会
草津白根山～芳ヶ平～草津、天神平～オジカの頭～万太郎山～土樽、
越後・ネコブ山、天元台～西吾妻小屋～大沢下り、吾妻・高山下りほか
- ◎すずらん通信 NO. 277 2004. 5 B5 18P 鈴蘭山の会
貉ヶ森山、立山スキー、越後・浅草岳、守門岳、餓鬼谷～シラタケ沢、
雪倉岳スキーほか
- ◎すずらん通信 NO. 278 2004. 6 B5 14P 鈴蘭山の会
丹沢・中津川キウハ沢、4町4反の沢、奥多摩・一ノ瀬川竜喰谷ほか

—— 会報 ——

- ◎ADVENTURE forum NO. 14 2004. 2 A4 8P 植村記念財団
アラスカの大自然を駆け巡る栗秋正寿紹介ほか
- ◎ADVENTURE forum NO. 15 2004. 7 A4 8P 植村記念財団
リヤカーを引いて地球を一周の永瀬忠志紹介ほか
- ◎岳報 水戸 NO. 1～25 2004. 4 B5 水戸山の会
月2回発行される月報を冊子にまとめたもの。
- ◎岳報 水戸 NO. 26～50 2004. 5 B5 水戸山の会
上に同じ
- ◎岳報 水戸 NO. 51～75 2004. 2 B5 水戸山の会
上に同じ
- ◎岳報 水戸 NO. 76～100 2004. 3 B5 水戸山の会
上に同じ
- ◎山水 NO. 28 2002. 8 B5 42P 常北山水会山岳部
13年春山合宿・梅池白馬周辺、夏合宿・和賀堀内沢遡行、
14年春合宿・剣岳早月尾根、その他常念、燕岳など8本の記録ほか
- ◎山水 NO. 29 2003. 8 B5 45P 常北山水会山岳部
15年春合宿・鹿島槍ヶ岳東尾根、その他北ア銀座など8本の記録ほか
- ◎年報 沢胡桃 NO. 1. 2 2004. 7 B5 153P グループ沢胡桃
東北の沢・和賀3本、栗駒1本、焼石4本、虎毛4本、二口3本、朝日4本、
蔵王1本、南会津3本、関東周辺の沢・上信越2本、二王子1本、谷川5本、
那須3本、裏日光1本、紀伊半島の沢・5本、その他3本、ほか
(注、会報と一緒にCDが同封されてきた。なるほどと感心してしまった。
これからは会報も、こういう形で発行されるようになるかもしれない)

編集後記

昨年、変臭長と同一年の松原社長が意識不明の重体に陥り未だ意識が回復していない。更に年も押し詰まった年末には、同一年の清チャンが急性心不全の為に還らぬ人になってしまった。一度に2名の山仲間を失ってしまったが、寂しい限りだ。松原社長には1日でも早く回復して欲しいと願うばかりだ。

振り返ってみると、昨年は松原社長、清チャンとは7回以上は一緒に山に行っている。今年は一緒にいけないので気の抜けたビールみたいな感じだ。

松原社長と清チャンはとうとう会報デビューしないままだった。何回となく会報デビューを誘ってみたが、なかなか山行記録を書いて頂けなかった。今にして思うと無理にでも書いて頂き、記録を残して置きたかったと後悔している。山に登って山行記録を残す事は、その人の生き様を残す事と同じと思う。これからも四季を問わず可能な限り山に登り、自分の生き様としての山行記録を残したいと思っている。

変臭長

季報〔R&V〕第52号&53号

発行者：本図一統

発行所：ACC-J 茨城 305-0861 茨城県つくば市谷田部2268

木村 一 方

編集者：木村 一 校正 渡辺聡子

印刷所：やさし印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団